

---

# とある科学の幻曲奏者～シンフォニスト～

ゆーたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の幻曲奏者〜シンフォニスト〜

### 【Nコード】

N7669L

### 【作者名】

ゆーたん

### 【あらすじ】

総人口230万人の8割が学生の学園都市。そこでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生はレベル0（無能力者）からレベル5（超能力者）の6段階に分けられた、超能力が科学的に証明された世界。その学園都市のとある学校兼研究機関にて、AIM拡散力場を刺激・反応変化させる能力者が現れた。三橋エレナ・それが彼女の名前である。彼女の担当者の死、逃げ出した彼女が出会ったのは一人の無能力者だった。

## S 1 襲撃の夜（前書き）

不定期連載ですが、急に思いついたので書いて見ます。  
処女作と同じように、文章が稚拙だったり誤字があったりですが、  
こちらでもご愛読頂けたらうれしいです

## S 1 襲撃の夜

総人口230万人の8割が学生の学園都市。ここでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生はレベル0（無能力者）からレベル5（超能力者）の6段階に分けられ、様々な能力を開花させている。超能力が科学的に証明された世界。科学力が外界の十数年以上も先に進んでおり、強固な外壁と防備力によって外界から隔離されている。

23に分けられた学区と呼ばれる区画。ある学区のはずれに、スキルアウトと呼ばれる不良たちがたまりばとしている場所がある。いつもは仲間でにぎわうこの空間も今日で終わりになった。電気の通っていないこの場所は、ドラム缶に可燃物をいれその炎が唯一の明かり。いつもはその周りを囲うように集い、話したり騒いだり。ただ今日に限って光景が違った。

「はあ・・・はあ・・・」  
息を切らしこのままビル群を奥へ奥へと走っている。ドラム缶の火の明かりは完全に届かず、所々は夜空の星や月の明かりも届かない場所もある。

「な、なんだよ」  
誰にいうでもない、今起きている事態が彼にとってには信じられない事である。影に潜み自分が走ってきた道の様子を探る。視界はそれほど良くないが、人影や物の判断が出来るくらいの明かりはある。

「っはあ・・・はあ・・・巻いたか・・・」  
ふうっと大きく息を吐き出し、自分が身体を隠している建物の中の細い道を奥へと歩いていく。ここで過ごすようになって数ヶ月。ここの通りの事は少しは詳しくなっているため、見つからずに元の場所へと戻る事もできる・・・と確信していた。しかしその確信は次の瞬間粉々に崩れ去る事にある。

カシャンカシャン

「ひっ」

金属音が聞こえてくる。それは今自分が向かおうとしていた奥から、こちらへと近づいてくるように徐々に大きくなる。

「な・・なんだ・・なんなんだよ」

その後彼が声を出すことはなかった。

「これで3件目ですわね」

第7学区にある第一七七支部で、ツインテールの少女はweb上のニュースを見てつぶやく。それを後ろから造花の髪飾りをつけた少女が覗き込む。

「うわ、この学区に近くじゃないですか」

「初春、もしかしたらこの学区でも起こるかも知れませんかよ」

「ええ怖い事言わないでくださいよ、白井さん」

ツインテールの少女、白井黒子<sup>しほこくろこ</sup>。志願した学生より選抜された、学園都市の治安維持機関『風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>』の第一七七支部にて活動している彼女は、造花の花飾りをつけた初春<sup>ついはる</sup> 飾利<sup>かざり</sup>をパートナーとして共に活動している。生徒の能力レベルを問わず風紀委員になる事も可能であるが、白井 黒子はレベル4の空間移動能力<sup>テレポート</sup>の使い手で、同等の能力を持つものは数少ない。初春 飾利はレベルは1と低いものの、彼女は特殊なスキルとして超一流のハツカーでもある。彼女の情報収集および伝達能力の高さでバックアップはおろか、一部では密かに恐れられている。

そんな彼女らが見ているのは1つのニュース。スキルアウトと呼ばれる、能力開発に行き詰まり学校へ行かなくなった不良たちが、襲撃されるという事件が最近世間を騒がせている。不思議な事は現場それぞれで外傷が違うと言うことであり、刃で切り付けられた者もいればひどい火傷を負っている者もいる。

「それにしても不思議なのは、外傷もなく絶命している被害者もいるみたいですよ」

「謎が謎を呼ぶ・・・これ・・・佐天さんが好きそうな話題じゃないですか」

「ほんとですわね」

その人物を思い描き黒子は笑っていると、勢いよく事務所のドアが開けられる。

「こんにちはー。初春いますかー？」

「あら、噂をすれば」

「いらつしゃい佐天さん」

そう言つて初春は入り口で出迎える。

佐天 涙子、自他共に認める初春の親友。長い黒髪に、白梅の花飾りをつけている少女。年の割りに黒子や初春より発育が良く将来が楽しみに思わせてくれる。レベル0ではあるが非常に行動力がある。風紀委員ではないがちよくちよく遊びに来ている。

バサア

ひらひらと制服のスカートがめくられる。本日は学校後のため初春は制服のセーラー服に身包む。初春と涙子の通う柵川中学の制服はセーラー服でスカートは紺色、涙子は一度自宅に戻ったらしく、デニード仕様のキャミソールにジーンズといった格好をしている。

一方黒子の学校は23に区分けされた学区の第7学区にある世界有数のお嬢様学校、常盤台中学に通っている。規則が厳しく外出にも制服着用と、私服は寮の室内くらいでしか着る事はない。常盤台は学園都市ないでも5本の指に入る私立の名門校で、レベル3以上でなければ、どんな令嬢でもお姫様でも入れないほど入学には厳しい条件がある。もちろん英才教育な学校なため、全員頭が良いのは言うまでもない。

めくられたスカートを慌てておさえ、顔を真っ赤にしながら涙子に抗議する。

「な、何してるんですか！めくらないてくださいよ、佐天さん」

顔を真っ赤にしながら佐天に対してわめく。はいはい、いつものように悪気のない涙子。その様子を見ながら黒子は微笑む。

「し、白井さんも笑ってないで何か言つて下さいよ」

「仲良しですこと。私もやってみようかしら？」

「あ、それいいですね」

楽しそうに両手をパチンと合わせ、黒子といたずらを企むにやりとした笑みを浮かべ、初春を見る。

「あら、楽しそうね」

いつのまにかドアからセミロングのヘアースタイルにメガネをかけた制服の上からでもわかるプロポーションの持ち主の女性が自分の席らしいところへ荷物を置いた。

「固法さんもめくつてみます？初春の」

「わー、わー。何言ってるんですか佐天さん」

「あ、あはは。私は遠慮しておくわ」

少しだけ引きつった笑いをしながら、いつものように冷蔵庫からムサシノというメーカーの牛乳をコップに注ぐ。

このり固法 美偉みいは黒子と初春の先輩にあたり、黒子に至っては新人研修の担当者ということから、頭が上がらない。レベル3の能力者であり透視系能力クリアポインクスの使い手であり、犯人の隠し持つ武器を発見したり、建物や道路の死角なども透視できる。なかなかブランド品にミーハーだが、頼れる切れ者である。

「そういえば固法先輩はこの事件、ご存知で？」

「ああ、最近いろいろ取り上げられてるわね」

そう言つて固法はコップの牛乳をグイッと喉へ流し込む。小さくプハアと聞こえたが三人はあえてツッコまない事にした。

ブルルルル

「はい、こちら風紀委員第一七七支部白井です」  
事務所の机に置いてある白い電話を黒子が取る。

「はい・・・はい・・・わかりました」

そういつて静かに受話器を置く。

「白井さん？どうかしました？」

白井は風紀委員の盾のマークが入った腕章をつけながら、

「また被害者が出たみたいですよ。行きますわよ初春」

「あ、待ってくださいよー。白井さん」

そういつて二人が事務所から飛び出していく。

「いつてらっしゃーい」

そういつて涙子は元気良く送り出した。

現場についた時には救急車や警備員アンチスキルと呼ばれる学園都市の教師および大人達による風紀委員と並ぶ治安維持機関。学生中心のため、危険および重要な任務につかされない風紀委員と違い、そういった任務を負かされる機関である。すでに警備員によって現場検証等開始されており、周囲の人だからも的確な対応によって流れていく。黒子は警備員に状況を確認すると今回の被害者は一人だけ。通報者の証言では女の子をナンパしていたところ、突然わめきだししばらくして絶命、当のナンパされた女のは気づいたらいなくなっていたらしいとの事。

「ついにこの学区にも着きましたのね・・・」

黒子は足取りのつかめぬこの事件に、不安を抱いていた。

## S 1 襲撃の夜（後書き）

いかがでしたでしょうか。

前書きでも書きましたが、不定期更新して行きます。

お読み頂いている方からのリクエストを頂きましたので、  
どうかで1作目のものとクロスさせたいと思います。

## S 2 手がかり（前書き）

途中だったけど、どんどん長くなりそうだったので、  
区切って投稿する事にしました。

まだオリジナルの主人公キャラは・・・できません。

では2話です、どうぞー。

## S 2 手がかり

「くーろじ」

不意に美琴が後ろから抱き着いてくる。耳元にわざと掛かるように、息を吹きかける。

「あああん、お姉様。いったいどうしたんですの？」

「ベ・つ・に」

人差し指で黒子のボディラインをゆっくりなぞりつつ、甘くささやく様に黒子の耳を蹂躪する。

（お、おとおお姉様。これはもしかして・・・もしかして・・・ついに、やっとわたくしの愛を受けとめてくださるのですね・・・。黒子は・・・黒子は・・・）

「どうしたの？早くこっちへきなさい」

いつの間にか真っ白なベッドの上に横たわりながら、自分の横のスペースに誘うように手でベッドをぼんぼんと叩く。

「お姉様・・・黒子は、黒子は・・・すべてを差し上げますわー」

黒子は美琴の隣へとダイブした。

「ううん、ああ」

ギシギシギシギシ

深夜の室内にベットのスプリングが激しくきしむ音が響く。

「おーねっさまー。激しすぎますのおん、あああああひい」

「うっさいわー」

ゴン

鈍い音と共に黒子は目を覚ました。

「あ・・・あら」

激痛の走る頭をさすりながら隣のベットを見る。

「ゆ・・・夢でしたのね」

そして再び眠りについた。

「あーっもう。あんたのせいで遅刻じゃない」

翌朝、二人はすっかり寝坊した。

「そういうお姉様こそ、ぐっすりお休みでしょよ」

「それは」

いつもの他愛の無いやり取りをしながら、急いで寮を出発した。

三回目のスキルアウト襲撃事件を知ったのは、初春からのメールだった。下校後すぐに第一七七支部へ向かった黒子は、着くと同時に三回目の詳細な情報を確認する。固法はじかに現場にて手信号で交通整理を行っており、現場の状況も警備員から直接聞いていた。今回襲撃されたのは全部で5人であり、体は切り刻まれていた。しかしどれも致命的な傷跡は無く、全員がすべてショック死というのが最終的な死因らしい。

「いずれも犯行は夜で・・・犯人の断定は難航しそうですわね」

「ふっふっふ」

両手に腰をあて得意げに初春は笑い出した。いつもとは違う雰囲気  
に黒子は若干押されぎみに上体をそらす。

「見てください・・・これですこれ」

そういつて初春がしめたのはとあるweb掲示板であった。

「XYZ?」

「はて?どこかで聞いたような名前ですわね」

「あ、あわわわ。こっちですこっち」

顔をまっかたにさせ慌てて別のウィンドウを表示させる。初春の慌てぶりに追求したかった二人だが、とりあえずそれは置いておく事で同意した。「瞬のアイコンタクトである。」

エクスキュージョナー  
「断罪人？」

「断罪人とはまた・・・」

「こここの掲示板で断罪人・・・正式には執行人ていうのに依頼の書き込みをすると、本当に依頼を請け負ってくれるみたいですよ」

いろいろリンク先を確認して見るも、依頼を請け負う事とそれに対する規約等の細かいページが数ページある存在している。

「ただ・・・」

黒子が掲示板のページを再度表示させる。

「書き込みの日付・・・2年前で止まっていますわね」

「ほんとだ・・・良く気づきましたね白井さん。私見落としてました」

初春はそのページをくまなく確認し出す。そしてある事に気づいた。「このページ、掲示板ばいですけどただのページです。書き込みの機能ないみたいです」

「どういうことですか？」

「わかりません。なにかあるのかもしれませんが・・・ソースにすごいフェイクが混ざって・・・」

黒子を凌駕する速度で処理を開始する。フェイクと行った余分な文字と記号を徐々に取り除いていく。

「なにがあるのかしら」

固法は険しい顔をして思考をめぐらす。

「それはきつと初春が証明してくれますわ」

そういつてPCのモニタを除くと、先ほどごちゃごちゃしていたソースがきれいに露呈してきている。

「わかりました。ここに・・・隠しリンクが・・・」

クリックするとメールの送信画面が表示された。文面の部分には、テンプレートのように入力項目が表示されている。

「これで足取りがつかめるかもしれませんね」

「でも危険ね。ここを警備員に情報提供しておいたほうがいいかも」

「そ、そうですね。では提供するためのデータをまとめておきます」

「お願いね。私の方でも一度連絡をしておくわ」

「それでは私は、警邏に行つてまいりますわ」

「白井さん、無理したらだめよ。何かあつたら私たちが警備員に連絡を」

わかりました、と頷いて黒子は支部から出て行つた。

「ま、まっつてくれよ」

壁際に追い詰められた青年は目の前の存在に懇願する。掌を向け敵意が無い事を相手にジェスチャーする。ただ青年の面前には闇が広がっており、青年が立っているいちにある外灯は青年を明るく照らしたいため、余計にまわりの闇が濃く感じる。

「ハープはどこ？」

正面からの声に青年は答える、知らない、と。

「ハープを渡せ」

別方向からの声に慌てて、そのほうへ向く。しかし闇が深いためなにがあるのか全く見えない。

「ほ、ほんとだ。ほんとに知らない。ハープなんて知らない」

がくがくと震えだす足だが、壁に背中をあずけなんとか立つ事を保っている。

「隠すためにならない」

「ま、あなたももう用済み。知らないなら消えて」

「う、噂はほんとだったのか……。あんたらがアンサンプルマイスター」

「あなたのようなクズに覚えていただいてるなんて、光栄ね」

「四人の幻曲奏者」  
シンフォニスト

その言葉を最後に彼は、翌朝通行人の通報により発見される事となる。

ピリリリ

鳴り出した携帯の通話ボタンを押す。

「はい・・・はい・・・わかりました」

短い通話を終え絶命した彼をその場に残し、この場を後にした。

「先生からの連絡。ハープはこの男が持っている」

先生と呼ばれた電話の主。携帯に目標の男の写真が転送されて来る。サイドは黒髪で短髪のように短く、上は金髪というより茶系に近い色をしておりシヨートより少し短めの長さの髪を横に流している。

全員の端末にてこれを確認し闇の中へ消えていく。かすかな旋律を残して。

## S 2 手がかり（後書き）

次回で主人公キャラを登場させるつもりです。

結構ご都合主義な能力だったり強さだったりです。

他では聞いた事あるような感じですが、

原作にも外伝にも登場してない能力だと思ってます。

それではまた3話でお会いしましょう。

絶対運命・・・黙示録

### S3 二人(前書き)

えっと不定期と言っていたわりには、更新頻度が高いですね。最近はこちらの事ばかり考えてしまったり。

ではこちらもお楽しみください。

「ジャケット風紀委員ですの」

そういつて黒子は腕章を見せ名乗りを上げる。現場に到着したときは、伸された不良数名と鬼気とした男が1名。その男は息も乱しておらず伸された不良が呻きを漏らす。男はゆっくりと振り向き、腕章を見た瞬間げつと聞こえるような表情で硬直した。

「もがみ最上さん、おまた・・せ・・」

その彼に右手に少し高級そうな、しかしよく使い込まれている鞆をもって走りよってくる少女は、最上と呼んだ男の固まった表情を見て声を押し殺すように震え始める。

「ぶぶ・・ぶくく」

「エレナ笑うなよ」

切なそうな表情で笑いをこらえている少女へ言った。明るい茶色のセミロングの髪に、巻き髪のパーマを当てられているうえに、顔立ちは上品でどこかのお嬢様ともいえそうな雰囲気をかもし出している。

「だって・・その表情」

笑われている彼は、横は黒髪短髪で、上は金髪というより茶系に近い色をしている。下がってきた前髪をかきあげる。そんなに長くないため、かきあげてもすぐにさがってしまっただが。

「え・・つと・・通報にあつた暴漢は、伸びているこの方達ですわね」

ひくひくと地面に伏している彼らに目を配らせる。やれやれと思いつつため息をつく。

「エレナ・・」

「はい？」

「走るぞ」

「ええ？ちよつと」

そういつて走り出した最上の後ろを追う様にエレナも走り出した。  
「ちよつと、おまちなさいな・・つて。この方達の処理をしません  
とですわね」

携帯を取り出し警備員アンチスキルへ連絡した。

「あいつ、派手にやりすぎじゃん」

黒子からの連絡で小隊で現場に駆けつけた警備員アンチスキルの隊長格を担つて  
いる、黄泉川よみかわ 愛穂あいほは呆れたように言った。紺色のお尻まで届くほ  
どの特徴あるロングヘアを後ろで一つに縛っており、抜群のプロポ  
ーションをもっているが、今はそのラインが武装した警備員の服装  
に隠れてしまっている。現場にて隊員に的確に支持しつつ、頭をか  
きながら書類に状況を記載していく。

「あ〜」

黒子の呼びかけに書いている手を止めて、黒子の方へ顔を向ける。

「ん？ああ、ご苦労だったじゃん。あとはこつちでやるから、もう  
帰っていいじゃん」

そう言つて書類に視線を戻すも、黒子の再度の呼びかけに今度は書  
類に書くのをとめない。

「ん〜どうしたじゃん？」

「例の男性について何かご存知ですか？」

「ん？ああ、最上の事か？あいつはヤンチャだからな。警備員で知  
らないやつはいないじゃん」

「え・・えと・・いつたい・・」

ますます謎が増した返答にトーンがさがる。

「お前んとこの花飾りに、バンクで見てもらえじゃん。名前は最上もがみ  
天成てんせい。これがやつの名前じゃん」

メガネをかけた女性の警備員に呼ばれ、現場の最終確認し警備員の専用車両へ乗り込んだ。

「白井さんでましたよ」

こっそりと初春のハッキング能力でバンクのデータへアクセスする。

「ありがとう初春・最上天成・レベル0」

レベル0・無能力者と言うことは別段学園都市では普通で、学生の約6割は無能力者である。黒子が気になったのは別の欄内の情報。

「風紀委員ジャッジメントですね・第171支部所属」

「白井さん、この人がどうしたんですか」

「ええ、この間の暴漢を」

「あら？またバンクデータみてるのね」

そう言っつて牛乳を入れたコップを片手に、固法が覗き込んでくる。

「あ、最上君じゃない。またなんかやったの？」

「また？固法先輩ご存知なんですの？」

固法は少し笑いながら一口牛乳を飲む。

「彼、昔に知り合ったのよ」

「それって」

白井は少し言いづらそうに固法から視線をはずす。

「ええ、私がいちやだったときね。先輩もね、彼の事は認めたのよね。でも結局、彼はいつの間にか風紀委員になっててね」

何かを思い出したように固法は、ぶつと声を漏らす。

「彼が風紀委員になった理由がね、先輩も含めて合法的にケンカするためだつて」

「はい？」

「単純でしょ。でも最近はまじめに風紀委員の仕事してるって聞い

たけど」

そういつて固法は上に視線を上げながら下唇に人差し指を当てている。

「私はてつきり、スキルアウトかと思いましたわ」

「たしかに、彼もなじみのメンバーはまだいるようだけど・・・」

「そういえば、一緒にいた少女・・・どこかで・・・」

そう言つて黒子はもう一度初春とバンククを検索し始めた。

### S 3 二人（後書き）

ちよこーっただけ主人公キャラを出して見ました。

能力はあらずじにちよこっただけ書きました。まだ登場できてませんが（笑）

エレナのフルネームは、三橋エレナです。

そして男の方は最上天成です。

これ考えたのは今日の仕事中です。暇だったので。

思った以上にぽこぽこ書いてますので更新ははやいですが、進みは遅いかもですね（笑）

では第4話でお会いしましょう。

S 4 天成さん（前書き）

久々の更新です。

今後はこちらの更新速度も上がると思います

では本編どうぞー

## S 4 天成さん

「三橋エレナ。讚陽音楽学校中等部3年・・・感応系能力者レベル3」

翌日、黒子は初春に頼んで現場にいたもう一人の人物、エレナという名前からバンクデータを抽出させ、顔を覚えているため意外と早く発見できた。

「白井さん、この人なんですか？」

「ええ。たしかに現場にいたのはこの方ですわ」

黒子はバンクの写真を再度確認する。明るい茶色のセミロングの髪、少し巻き髪なのがお嬢様みたいな雰囲気醸し出している。

「この方、捜索願がでてましたわね」

「えーとこれですね」

すぐさま別のウィンドウにデータを表示する。

「たしかに四矢峪学園から提出された捜索依頼ですわね。えーと捜索依頼が出されたのは」

「2週間くらい前みたいですね」

「2週間？」

黒子はその言葉になにか引っかけかりを覚えた。

「それって」

「どうかしましたか？白井さん」

「初春、すぐさま襲撃事件の過去のデータを」

「はい。これです」

「やっぱりですの」

過去のデータを確認して行く。すべての日付を確認し、黒子はある仮説へたどり着く。

「この方の捜索依頼が2週間前。スキルアウト襲撃事件も2週間前。何か裏があると思いますの」

「調べて見る価値はありそうですね」

そう言って初春は再びパソコンの方へ向きなおした。

「すー……すー……」

教室の机に突つ伏して、規則正しい寝息を立てて気持ちよさそうにしている。窓際の席、それが彼の勝ち取った王者の席……と彼自身は思っているのだが。

「最上……おきろお」

これが授業中でなければいいのだが。

「すー……すー……」

教師の言葉が聞こえてないのか、かまわず彼は夢の中へ。

割と温厚なのが居眠りの生徒に対して、必殺技をもつこの教師の授業では、居眠りの生徒が極端に少ないのだが、彼はその中に漏れ居眠りが出来る存在である。

「覚悟しろ……」

教師は持っていたチョークを親指で上にはじき上げる。クルクルと回転し落下するチョークに狙いを定める。ピリピリとしたオーラを醸し出しつつ、狙いを天成へつける。

(で……でるぞ……)

教室の生徒の思考がリンクする。

「超白墨砲」  
チョークガン

スパン、と気持ちのいい音と共にチョークがまっすぐ天成の頭めがけて飛んでいく。教師の脳内では、そのチョークは音速の壁を声まるで超電磁砲のように見えている。鈍い音と共に直撃したチョークはその威力を、すべて天成の頭に伝え床に落下する。

「つつつ」

あまりの激痛にその部分を急いでさする天成の目には、涙がうつすら浮かんでいた。しばらくさすっていた天成は、チョークを拾いゆ

らりと席を立つ。そのままふらふらとしながら教師のほうへ歩き始めた。教室の誰もが言葉を失い彼の動向を見つめる。そして彼は教師の前に立ち鋭い眼光で睨みつける。

「これを解いてみる」

その眼光に臆する事無く教師は黒板を軽く叩く。眼光の先を黒板に書かれている問題へ向ける。暫く硬直したのち、拾ったチヨークで答えを書き始める。そして書き終えた天成はそのチヨークを教師へ渡し、自分の席へと戻った。

「最上、お前できるのに居眠りばかりだから、成績3しかだせないのだよ。もつとしつかりしてくれよ」

「へーい・・・」

そういつてまた彼は机に突っ伏した。

「最上」

教師の泣きそうな声が聞こえたが無視することにした。

この授業が今日最後の授業の為、気づいたときにはHRが終了していた。最上に近づいた担任は、持っていた名簿で頭を軽く叩く。

「最上、おまえもうちょっと授業態度なんかならないか？」

成績は非常に優秀で風紀委員としても、割とまじめにこなしている。ただこのままではいい大学が紹介できないぞと2年になった時からさんざ言い続けていた。

「そんな事いつても住谷ちゃん、警邏で眠いんだよ」

このクラスの担任、住谷久英をちゃん付けで呼ぶのは天成だけである。

「わかってるがな・・・とりあえず学校側としては襲撃事件が多いから早く帰宅すること。あまり無理はしないでくれよ」

「わーってるって」

住谷は1年の時も担任であり、いろいろ面倒をかけているので心の中では頭があがらない。

(すでに巻き込まれてる・・・なーんていえないな)

そう思いながら取り出した携帯にメールが1通受信していた。

「エレナ・・・あいつ」  
鞆を持ち急いで校門へ向かった。

「あ、天成さん」

男子がチラチラと見たり様子を伺っていたが、天成のツレとわかるとそそくさと散っていった。

「お前・・・立場わかってるか？」

「わかってますよ。天成さんに守ってもらうお姫様です」

「いや確かにそうだが・・・」

時々論点や答えがずれた事を言い出すエレナに、半ばあきれつつ、

「まあいつか」と伝えた。

「俺の部屋からここまで来るまでに、つけられたりは？」

「大丈夫だと思います。声をかけて来た男の人はいましたが」

「どんなやつ？」

「学生さんですね。遊ぼうとかお茶がどうか言っていました」

それを聞いて天成は安心した。ただのナンパだったからだ。現在の彼らはナンパくらいかわいいものと思えるくらい、なんかに巻き込まれていた。それは彼女を助けたあの日から始まった。

S 4 天成さん（後書き）

ぬあー思いつきで書いてる漢字が否めませんが・・・  
のんびりと日常な感じがでちゃってますね。

確信にうまく話を持っていけるようにしたいと思います。

では5話でお会いしましょう

S 5 幻曲奏者（シンフォニスト）（前書き）

こんばんは、連日の投稿です。

まずは本編をお楽しみください

## S 5 幻曲奏者（シンフォニスト）

パチパチパチ、とホールに響く拍手喝采。その拍手はステージ上にいる一人の少女へ向けられている。少女は拍手を送る観客一人一人を見るように、ゆっくりと顔全体を動かす。

学園都市にはさまざまな教育機関や研究所があるが、その中で讃陽音楽学校と呼ばれる音楽に優れたものが迎え入れられる学校がある。中学高校大学とエスカレーター式が特徴で、音楽に優れていれば能力レベルに限らず、入学できるのが特徴だ。そして特に学校側で優秀と認められた数名は、個別に担当が専属でつき1教室が与えられる。別名特進クラスというのがある。

その特進クラスの一人がこの少女、三橋エレナであった。

明るい茶色の髪がライトアップされより明るく見える。うつすらと汗を浮かべている彼女は、一礼をして袖に下がった。

「エレナお疲れ様」

ピシッとスーツをきた女性が出迎えた。セミロングのストレートの青髪にメガネが印象的名女性。目元はやさしく彼女に微笑まされると、エレナ自身もとても嬉しく感じている。

「先生、どうでしたか？」

「久々に大きなホールだから緊張してたわね。最初の方、音が上づいてたわ・・・でも誤差の範囲よ」  
そういつて優しく微笑み優しく抱き締める。

「今日は学園都市内の生徒さんばかりだけど、この間講師に行った常盤台中学の生徒さん達もいたから緊張したのかしら？」

「はい、私が受け持った方たちがいたので・・・でも次こそは」

「ふふ、そうね。でも今日は早く寝なさい。明日は能力の方のチェ

ツクをするから」

「わかりました」

控え室に戻ってきた二人は、帰り支度を始める。エレナは衣装を着替え学校の制服に着替える。キャメル色のブレザーにホワイトのブラウス、ネイビーブルーのチエツクのスカートが讃陽音楽学校指定の制服。先生と呼ばれた女性はエレナが使った楽器をケースにしまふ。その後は控え室にきた関係者各位に挨拶をし、関係者口の方へ向かった。関係者口の扉を開けると車がすでに待機しており、エレナは手前のドアから後部座席へ乗り、先生は反対側のドアから後部座席へ乗り込んだ。そしてゆっくりと車が走り出し、会場を後にした。

「先生」

「どうしたの？」

「私の力って・・・なんなのかな？」

エレナは俯きながら質問する。そんなエレナの頭に手を回し自分の方へ引き寄せる。

「どうしたの？自分の力が怖い？」

「うん・・・」

「大丈夫よ。きちんと能力を把握すれば大丈夫」

そういつていつそう抱きしめる力を強める。

「できれば使いたくない。今日の演奏のように、誰もを癒すために使いたい」

「そうよ。エレナの力は癒すためよ。あれは・・・守るために使いなさい。大切な人を・・・」

そういつてエレナの目を見つめる。

「あれは大切な人を守るためのモノ・・・あんな使い方は」

そういつて視線をエレナからはずし、悔やむような表情を浮かべた。  
「せ、先生？」

直後、キキーというタイヤ音と共に体が前に押される。先生はエレナをかばうように、前方を確認する。急停止した車のヘッドライトの先に、人の足が確認できる。運転手もあまりの事に驚いているらしく、体が強張っている。オートマのギアをPにいれ、降りるためにドアの部に手を添える。

ガシャーン

運転席のガラスが破られ、窓から運転手が引きずりおろされる。

「いや・・・」

あまりの出来事に、エレナは震えだす。

「エレナ・・・大丈夫よ」

そういつて優しく背中をなでる。徐々に震えのとれてきたエレナは、先生の顔を見る。いつもどおりの優しい微笑みが向けられていた。

「私が先に降りるから、合図するまで待つて」

そういつて先生は後部座席のドアを勢い良く開ける。ドアの前にはたものを弾き飛ばし、周囲を確認する。

「<sup>かな</sup>香奈先生」

車内のでエレナは叫ぶが、香奈は反応する事無く周囲を見回す。

（狙いはエレナか・・・）  
そういつて間合いをとりながら、数名の黒服の男が香奈の周囲を囲む。

「作磨の差し金・・・って答えないわよね」

言い終わると同時に足の裏から爆発てきな加速を生み出し、黒服達へ攻撃を仕掛ける。エレナの担任を務める香奈は、不足の事態に対応できるよう護身術を身につけ、さらにレベル3の能力者でもあった。

「ったく」

香奈の能力は衝撃<sup>インパクト</sup>を生み出す能力で、手や足、肩等の体の一部から発することができる。普通の打撃に衝撃の威力も合わせられる、接近戦特化の能力を有している。

黒服の男達は無能力者なのだが、それでも体術や格闘術には覚えのあるもの達なのだが、能力をプラスした香奈の前に次々に、倒されていく。

「エレナ」

その叫びと共にエレナは車から飛び出し香奈の後ろへまわる。

「エレナ・・・そのまま後ろへ」

「はい」

背後にも気にしつつ、徐々に後退を始める。黒服も一定の間合いを保ちつつ。前進する。

「もういい・・・私たちがやる」

そう言つて黒服達を横にどかせて、声の主が姿を見せる。

「やっぱり作磨んとこの・・・」

黒服をどかせ出現したのは四人の少女。黒服は少女たちの後方へと姿を下げる。

「あなたは、計画に対し著しく遅れをとっている。用済みです」  
そう言つて四人はそれぞれ構えをとる。

「ヴァイオリニスト・・・」

そう言つて警戒をよりいっそう強める。構えをとる少女達は、楽器を手にしてないのだが、香奈もエレナも表情は強張っている。

「せ、先生」

「大丈夫よ・・・エレナ。あなただけは」

「え・・・先生」

「恐怖につぶされてしまえ」

少女立ちはヴァイオリンを弾くように右手を動かす、弦を押さえるように左手の指を動かす。何も無いその場から、徐々にかすかに音色が聞こえだす。徐々に音が大きくなっていく。

「う・・・」

「うっ」

徐々に頭の中で音が大きくなる。

「く・・・あ・・・ああ・・・いやああ」

香奈は頭を押さえ、悲鳴をあげ地面に膝をつく。

「せ・・・先生」

エレナは持つていたケースを下に置き、何も無い状態で構えをとる。左右の手と指を動かしエレナも音を奏で始める。

「エ・・・レナ」

緩やかで穏やかな音。すべてに癒しを与えるような温かみのある音色を奏でる。

「先生」

少女たちとエレナの音がぶつかり、音と音が相殺して行く。少女たちの手の動きはAIM拡散力場を刺激し、その振動が鼓膜を伝わり音色のように聞こえる。刺激を受けた拡散力場は、徐々に反応変化して行く。エレナの手の動きにハープのような形に反応変化する。少女たちの手元には、ヴァイオリンのような形に反応変化する。

「くっ」

AIM拡散力場を刺激するときが発生する振動がぶつかる。お互いの集中力、演奏力すべてをぶつけていく。

「めざわりね・・・これで終わりにしてあげる」

四人の少女達は曲調を変える。先ほどよりも強烈に拡散力場を刺激する。刺激された力場は形状を形成し、質量を生み出し反応変化する。少女たちの前には、黒いフードをかぶり、大きな鎌を手を持つ骸骨の顔を持つそれが現れる。

「私の幻曲シンフォニー・・・死神、いや断罪者エクスキューショナー」

カシャンという音と同時に、それが地面に降り立つ。本来この世に在らざる姿を持つモノが赤い眼光を光らせがエレナと香奈をその視界に捉えた。

S 5 幻曲奏者（シンフォニスト）（後書き）

てことで、能力を明かして見ました。

タイトルにもなっていますが、幻曲を奏でる者で幻曲奏者です。学園都市全域にAIM拡散力場があります。

それをあえて利用した能力です。

振動・刺激させ反応を起こし質量を持たせる能力者です。だから触れたり触れられたりされるって感じですよ。

では6話で会いましょう。

こちらは毎日更新ではなくのんびり更新して行きますので、楽しみにお待ちいただければ嬉しいです

## S 6 鬼神（前書き）

てなわけで6話更新です。

やばいです。グダグダになってきます。

それと・・・ネタが・・・なんかイベントチックなのが・・・  
ネタ切れた？

とりま本編どうぞーお

「エレナ」

叫んだ香奈はエレナを抱きしめ後方へ飛び込む。

ヒュン、という風を切る音と共に、先ほど二人がいた地面に一筋の傷が刻まれた。振りぬいた鎌を肩に掛け、カシャンという音と共に二人のほうへ近づく。

「ハープをこちらへ」

ソレを発生させるまでは、激しく刺激させるため奏でていたが今はゆっくりと演奏をしている。そして少女達の指の動きにあわせ、断罪者が動きだす。

「エレナ逃げて・・・」

「でも先生」

涙を流しながら香奈の手を強く握り締める。こんな状況でもいつもと変わらず、エレナへ笑顔を向ける。

「今捕まったら・・・またあんな事を」

言いかけてエレナを突き飛ばす。その瞬間振り拭かれた鎌の先端が、香奈の胴体を貫く。

「ぐぶっ」

胃から逆流した血が口から滴り落ちる。

「に・・・げ・・・」

ごみを払うように鎌から香奈を放り投げる。ドサ、という音と共に香奈は横たわる。そのまま動かないまま、道路には赤い液が染み込んでいく。

「せんせえ!!」

悲痛の叫びも、香奈は応えない。

「ハープを確保しろ」

「いやあ・・・先生。いやああああ」

「ったく」

そうぼやきながら金色に近い茶髪の頭をかく。サイドは黒髪の短髪という奇抜な髪型の彼はぶつくさと街を歩いていた。あたりはすっかり夕暮れ・・よりも少し日が傾いており、紺色の空が橙の空を飲み込もうとしていた。彼は第171支部の風紀委員ジャッジメントのだが、今もだが昔からやんちゃでありその時の知り合いの店で、スキルアウトと呼ばれる不良が暴れていると連絡があつたのでやってきた。管轄外の地域だが、晩飯をごちそうするという報酬に乗せられ撃退していた。

「まあ、ハンバーグがうまかったからいつか」

下校時刻を越えているため、買い物をしている学生達の姿が多い。カップルや4人組の少女達が和気藹々と楽しそうに会話している。

「もう、お姉様だったら。その話は」

「えーいいじゃないのよ」

「でもでも素敵な話じゃないですか。白井さん」

「そーですよ。それにその話を仁科さんに聞かせてあげられたら」

「あんなのあんなあの」

そんな会話を聞き流しつつ、携帯を開く。

メール会員になっているスーパーのメールマガジンが届いていた。

「お、今日のお買い得か」

今日の献立を考えつつ、彼はスーパーへと向かうことにした。しかしその直後携帯がタイミング悪くなった。着信元は第171支部。

「はいこちら、最上です」

「最上さん、今通報があつて女性が暴行されそうらしいと」

「場所は・・・わかった。警備員には連絡しておけよ」

そういつて電話を切り、最上天成は現場へ急いだ。現場付近へ来る

頃にはすっかり当たりたりは暗かった。空は紺に染まり山の淵に最後の橙を残している。「いやー」という声の後に、前方から走ってくる人影が1つ・・・そしてそれを追う影が4つ見える。

「ふう。愛車があればもつと早かったか」

オイル交換の為にバイクを預けている為、ここまで走って来ていた。軽く息を整えながらばやきつつ、人影のほうへ向かう。

「きやつ」

躓いた拍子に、彼女は地面に倒れこんだ。それでも必死に逃げようともがくが、膝を強く打ったのか右足を引きずっている。自分を追ってきた黒服達をみながら、左足と手で後ずさる。追い詰められた彼女の背中には、ガードレールが彼女の退路を断った。

「おい、風紀委員だ」  
ジャッジメント

そういつて天成は右腕につけた風紀委員の腕章を見せる。黒服達の視線が一斉に天成のほうへ顔を向ける。

「うわ〜。コテコテナ展開に、俺は胸を高鳴らせちゃうなあ」

そういつて追われていた少女を見る。大切そうにケースを抱きしめ、おびえた様な表情で天成と黒服を見ている。少女の着ている制服は赤い染みが付着しているのが確認できた。なんとなくやばそうだと事態を把握し、彼女のほうへ歩み寄る。それを遮るように黒服達の前へ出てくる。

「あー、あんたらさ・・・警備員アンチスキルがくるからおとなしくしてくんない？」

やれやれといった表情で、めんどくさそうに黒服を見る天成だったが、彼らのサングラス越しの表情からにじみ出る殺気をひしひしと肌で感じていた。

「ほら」

くいくいつと指でかかってこいと合図する。風紀委員だがまだ学生の彼の挑発に、露骨に感情を爆発させる黒服はいなかったのだが、それをきっかけに彼を囲うように間合いを取る。少女から意識が外れたことを確認し、天成は肩の力を抜く。自然体のまま周囲の感覚

を研ぎ澄ませる。黒服は構えをとりこちらとの間合い、タイミングを計っている。

ゴツ、と鈍い音と共に天成の右拳がし右斜め前の黒服の顔面にめり込む。黒服の間をはずした一撃に、成すすべなく拳を叩き込まれた黒服は、地面に横たわった。

「ほい、一人」

均衡を保った一発で黒服一人は地に倒れた。それで陣形も緊迫の糸もとれたのか、黒服が天成に攻撃を仕掛けてくる。黒服の放たれた右拳を左によけ、そのままから空きの内臓部分に右拳を打ち込む。打ち込まれた部分を押さえ、倒れる黒服の左からきた黒服が、頭をめぐらして左足の蹴りを繰り出す。蹴りが届く前に軸足を払い、仰向けに倒れた所に顔めがけて左拳をつき降ろす。道路を背にしているため、衝撃がそのまま脳を突き抜け、三人目が沈黙する。

「ほら、もうおとなしくしない？」

そういつて退屈そうに後頭部をぐしぐしと触りあくびをした。

「ふぉーふんの？」

その天成の言葉にかぶさる様に、警備員の車のサイレンの音が聞こえてくる。徐々に大きくなっていく音に、黒服は「おぼえてる」なんてありきたりな台詞を言うでもなくこの場から走り去っていった。「やれやれ」

その後姿を見送りながら、少女のほうへ体を向けた。

「そーいやな・・・あれ？」

先ほどの少女の姿はなく、周辺を捜しては見だが結局見つからなかった。

「ちわー、黄泉川さん」

天成が黒服達を伸した場所から、離れたところに止まった警備員の車のところまで、倒した黒服を引きずってきた。お尻くらいまである長い髪を後ろでまとめた女性、黄泉川は天成の姿をみるなり「またか」といった表情でため息をついた。

「ちょっと、ひどいんじゃない？ほらこいつら」

そういつて引きずってきた黒服を地面に寝かせた。

「てかなんかあったの？」

「ああ。女性が一人ここでな・・・」

視線を移すと死体袋が数人で車の中へ運ばれていく。視線を手前に向けると、自分が倒したような黒服の男が数人倒れていた。

「こいつらが？」

「さあな。ほらこの件はあとほらこちらがやるじゃん。風紀委員のおジャッジメント前はこれ書いて帰るじゃん」

「はいはい」

そういつて手渡されたに書類、駆けつけてからの事を記載し黄泉川に渡した。

「お疲れじゃん。あとはこつちでやるから」

それじゃ、と片手をあげ天成は現場を後にした。バイクがないため歩きで帰宅している天成は、無理言つて車で送ってもらえばよかったと少し後悔していた。

ブオオオオオン

車のエンジンが吼える。

(やれやれスキルアウトか?)

そう思つて振り向いた先には、一台の車とそのヘッドライトに映し出される人影。何かを感じ急いでそちらに走り出す。人影は左右に走り車から逃げるように走っている。キュッキュタイヤの音をさせながら、後ろの車は前の人影の後ろを追いかけている。

「ちっ」

その人影を抱きとめて車のボンネットを蹴りあげ、車を飛び越える。キョキョーとタイヤから煙をだし、車が横滑りしている。

「おまえ」

抱きとめていたのは先ほど追われていた少女だった。会話が出来ないくらい息を乱し天成の腕を強く握る。

「何で追われてんのかねえ」

ブオオンとアクセルでエンジンを吹かす音。強く握っている彼女の頭を軽く撫でる。その瞬間ふつと手の力が抜けたので、少女をそつと横の歩道に座らせる。

ブオオンブオオンと2度アクセルを踏み、車が吼えている。

「これ預けるからな」

そういつて制服の上着を彼女にそつと掛けた。

「車かあ」

そう言つて左半身を前にだし腰を落とす。もつとも力が入る位置に足を開き呼吸を整える。キュルルルと車が急加速時に発生するホイールスピンの音を鳴らし、車が徐々にこちらへ向かってきている。

「女の子を泣かせるやつは・・・」

ふん、という気合と共力をこめる。ぎちぎちとワイシャツが悲鳴をあげ、両腕の筋肉が盛り上がる。ピチピチと音を悲鳴をあげ繊維が伸びていく。ブチという音と共に切れた袖口から、引き締まり筋肉が隆々とした腕が見える。胸や腹筋、体全体の筋肉もそれに呼応するように隆々としていく。彼の体から発せられた気を纏い、彼の存在をより大きくさせる。存在しないはずの風を、間近で見ている彼女は感じていた。彼が発する気が、周囲の空気を巻き込み彼に渦巻くよう吹く。一般的な比率での隆々たる様だが、今の彼女にはとても大きく感じる。それは車にのっている者もソレを感じている。鬼神の如き眼光を光らせ、突進してくる車に拳を突き出す。右足を前に出し左足で踏み込む。

ドガン

突き出された右と左の拳は、車のフロント部分に衝撃を与えへこませる。まるで壁にでもぶつかったような衝撃を受けた車は、リア部分が跳ね上がり回転するように天成の頭の上のさらに上を飛んでいく。

ガシャン

という音と共に屋根側から落ちた車はその動きをとめた。

「よお、大丈夫か」

そう言つて少女の前にかがんだ天成は、彼女へ手を差し出す。

「あなたは？」

「俺は風紀委員の、ジャッジメント最上もがみてんせい天成だ」

「あたしはエレナ。みっはし三橋エレナよ」

エレナは差し出された天成の手にそつと触れた。

## S 6 鬼神（後書き）

いかがでしたでしょうか。

パラトラと違った感じに書けてるでしょうか。

まあ気づいた方もいるかもしれませんが、  
サプライズしてみましたよん

S7 お問い合わせ(前書き)

はいーなんとか7話目を投稿です。

## S7 お願い

「んあゝ」

大きな欠伸と大きな伸びで、今日一日の開始を体に伝える。しかし頭は正直で体には二度寝の信号を送る。そのまま肌がけに手を伸ばす。

むにゆ

(むにゆ?)

手の先を見ると自分の横ですやすや眠る少女。その少女の胸に手がジャストフィットしている。

(ふむ・・・か・・・)

何度か感触を楽しみつつ触診にてサイズを触測する。

「えっち」

ぼそつと聞こえた声に少女の顔を見ると、眠たそうな目をしながらこちらに視線を向けている。心なしか頬を膨らませている気がしなくもないが・・・。

「うわっ起きてたのか」

「それは胸をそんなに揉まれたら、誰でも起きますよ」

そういつて1つ欠伸をする。年相応な可愛い欠伸である。

「てかなんで俺の横にいるんだ」

「なんでもです。それでも私の胸を触った事には変わりません。」

「いや・・・まあ・・・すまねえ」

「いいですよ。これ貸し1つですからね」

そういつて微笑む彼女に、天成は「はい」と返事するしかなかった。

「おやつさんと女将さんには報告しないと」

そういつた彼女の肩を両手でガシッと掴む。

「な、なにが望みだ」

「そうですねえ」

そう言つて人指し指を下唇に添えて、うーんと唸っている。

「この間のお願い、聞いてくださいね」

そう言つて天使のように微笑んだ笑顔は、天成には悪魔の微笑にも見えた。

「この間の・・・ねえ」

「あたしはエレナ。三橋<sup>みつはし</sup>エレナよ」

そう言つて天成の手握り立ち上がる。ずいぶん汚れているがスカートの辺りを叩き、砂を下に落とす。

「ちよつと待つてな。今警備員<sup>アンチスキル</sup>呼ぶからさ」

携帯を取り出した天成の手を、エレナは掴みそれを拒む。

「だめ！」

そう言つて天成に携帯を使わせないように、しっかりと腕に体を抱きつかせる。

「えつと・・・」

あまりの事に困つた反面、発育のいい胸の感触にウキウキしていた。  
(なかなか・・・あるな)

そんな事をよそに、エレナは真剣な顔で天成に顔を向けた。その目  
があまりにも真剣で怯えていて澄んでいて、天成は無意識に見とれていた。

「あの・・・ありがとうございました。ほんと・・・ごめんなさい」

そういつて天成に一礼すると、道路に落としていたケースを拾いい  
そいそと走り去ってしまった。天成はその後ろ姿を見つめていた。

見えなくなつてから、思い出したように携帯で警備員<sup>アンチスキル</sup>へ連絡をした。  
やってきた黄泉川に、ため息といういろいろぐち言われたの言う

までも無い。

「黄泉川ちゃん・あんなに言わなくても」

そう言つて第7学区にある酒屋の外階段を上つて行く。現在は住み込みでこの酒屋の手伝いをしつつ、学校に風紀委員ジャッジメントにとこなしている。荒れていた中学時代にここのおやっさんに連れてこられたのがきつかけだった。もともと住み込み用として作られているため、暮らすための環境はすべて整っている。ただ夕飯等は間に合えばおやっさんや女将さんと一緒に食べるため、キッチンはほとんど使つた事はない。

「つかれたなあ・こんな日は早く寝てつと・・・」

ポケットから鍵を取り出しドアの鍵穴に挿した所で、背後に視線を感じる。ゆつくりと鍵を抜き、すばやく背後へ向き直るとそこには先ほど助けた少女が立っていた。そしてかすかに聞こえる音色。彼女の手の動きに合わせばんやりと、ハーブのようなモノがはつきりと形どられていく。そして彼女の引くハーブから青白い帯が空へ伸びて行く。幾重にも重なつたその帯はやがて一つの形を形成していく。

「な・・・」

「天成さん・・・これが私の能力です」

幾重に重なつた帯が真ん中から左右に開かれる。中から出てきたのは白銀の甲冑に身を包んだ人型のソレ。羽飾りのついた兜は目元まで隠し、さらされた口元や鼻筋は女性らしさを感じさせる。胸元の膨らんだ甲冑から女性と言う事を確信させ、白銀の肩当てと籠手が神々しさをさらに彩る。腰から伸びたスリットの入った膝下の丈のスカート、脛から下を守る白銀のグリーブ。そして腰くらいまでの長さの銀色の細い髪が空中に波を打っている。腰に当てられた鞘にはシンプルな形の柄があり、女性騎士を思わせるソレに・・・エレナの生み出した騎士から目が離せないでいた。

「こ……これは？」

「ヴァルキリー・オブ・ジ・ラウンド  
円卓の戦乙女」

「ヴァルキリー  
戦乙女……」

戦乙女と呼ばれたソレは、天成の前に降り立つ。カシャンという金屬がコンクリートに触れた音と共に、天成の目の前にはソレが……。伸ばされた手が天成の頬に触れる。触れられている……。その感覚はある。だがやはりこの世のモノとは違うような肌触り。ぬくもりも無い、ただそこにあるソレが当たっていると目が認識しているに過ぎない。

「これは学園都市全域に存在する、AIM拡散力場を私の能力で質量を持たせたのです」

「AIM拡散力場？」

たしかそんな言葉をいつぞやの事件の時に、風紀委員と警備員で行った合同会議の時に、どっかのお偉いさんが口にした単語だったが……。

「AIM拡散力場とは、能力者が無意識に……。無自覚に発している人間の感覚では感知できない、微弱な力のフィールドみたいなものです」

「それが……。これなのか？」

そう言つて戦乙女を上から下まで視線を動かす。

「そうです。いま私の能力……。それで刺激し反応変化させて質量を持たせています。だから天成さんにも見えますし触る事も出来ません」

「でも……。こんな能力聞いたこと無いぞ」

「そうです。私の通う讃陽音楽学校で、この能力を使えるのはたった数名しかいません」

「だから狙われてたのか」

「エレナは頷く。」

「この能力の副産物として、拡散力場を刺激した時に発生する振動が、人には音色として認識されず。この音色を使えば幻覚を見せ

ることも出来るんです」

エレナは俯いたまま、手を止める。刺激が無くなった戦乙女は、質量を失い粒子が手足の先から拡散して行く。ただのAIM拡散力場になったそれは、天成の視覚から消えていた。

「私・・音楽が大好きなんです。先生に教わったヴァイオリンも、ハープと呼ばれている私の能力も、音色で人々の喜ぶ顔が見たいんです。だからあんな事・・もうしたくありません」

そういったエレナの瞳から雫が流れ出る。コンクリートにしみこんだその雫をに気づいた天成は、彼女に歩み寄る。

「だから・・」

顔を上げたエレナの目から涙があふれ出ている。

「大好きな音楽を守るために・・先生の仇を討つために。こんな思いをするのも私で終わりにするために」

そういつて天成の胸に額をくつつける。

「私・・私に、力を貸してください」

そういつた彼女は、そのまま体を預けてくる。がくつとなった体を慌てて天成は抱き止める。

「気を・・失っちまったのか」

そういつて彼女を背負って、家のドアの鍵を開けた。

「嫌だといつた・・ら？」

「おやつさーん、女将さーん」

だわわわ、とあわててエレナの口を手で押さえる。苦しいと天成の手をパチパチ叩く。手を離すと、ぷはあーっと息を吸い込んだ。

「私を殺す気ですか？」

「それより・・脅すのは悪趣味だな」

「いいえ、あくまでも自主的にして欲しいですけど・・」

「とんだお嬢様を拾っちゃったな」

「先生の・・・影響だもん」

「まあ関わっちゃまったからな。何があつたのか・・・きちんと聞かせてもおうか」

学校の事、先生の事、初めて会つた時の事、それらを話始めたところで、下から二人を呼ぶ女性の声が聞こえた。やれやれ、と苦笑いしエレナと一緒に下の階へ向かった。

S7 お問い合わせ（後書き）

えー日常を書いて見たかったのですが、お約束の展開付きです。  
男ならそりゃ手は動くでしょうと言っ感じます。

作者が同じ状況ならそれで終わリませづゲラ

えー一部不快な表現がございました事深くお詫びいたします。

## S 8 目的（前書き）

8 話目です。

なんかグダグダでも許してね。

「・・・という感じです」

今日は学校を久々にサボリ、自宅でエレナの話聞いていた。

あの日香奈が殺された事。それを襲ったのが同じ特別クラスの生徒だと言う事。香奈が言っていた作磨の事。

「その作磨ってやつが、エレナの先生を襲わせたのか」

こくりとエレナは頷いた。あの時の香奈の姿を思い出し、エレナは目に涙をためていた。それを指で掬い天成のへ視線を戻す。

「私を狙うのはきつと・・・私が一人で反応変化させることのできる力を持っているからだと思います」

「でもあの時襲った生徒ってのは4人で言ってたよな」

「あの子達は4人揃わないと反応変化させられないと先生は言っていました」

「なるほど。だから一人で反応変化できるお前が欲しかった。だからお前の先生を襲ったって事か」

「たぶん・・・。香奈先生は私の能力を使った戦闘訓練は、極力しないようにしてたみたいですよ」

ふう、と一息つき天成はテーブルの上に乗せられたペットボトルを手に取り、その中の液体を喉に流し込む。同じようにエレナも自分の分してもらったペットボトルを手を取った。

「作磨先生・・・あの人は、幻覚パターンと刺激振動係数、AIM奏手の感情やイメージの関連。そして質量発生時の戦闘能力及び汎用性能。それらの成果を示すのが、手っ取り早いと考えているんです」

「なるほどな。たしかにレベルの高い能力者がいるとなれば、評価も全然変わってくるだろうしな。それにAIM拡散力場を利用した能力となれば、その手の研究が加速度的に進展するだろうしな」

「香奈先生はこの力を療養やカウンセリング等での使用の可能性を

研究してました。AIM拡散力場を振動させ、脳に直接伝えることで、耳の不自由な人も音楽を感じられる……。その考えに賛同して香奈先生に担当してもらおうように嘆願したんです」

エレナはくやしそうに、寂しそうな表情で自分の服の裾を握り締める。

「てことは、その作磨ってやつをとっ捕まえる為にも例の4人組みのやつらを捕まえなきゃだな。そいつらなら何かしら知ってるだろうし」

「はい」

エレナは笑顔で返事をした。目には涙をためてはいるが、彼女は強いまなざしを天成に向けた。

「よし」

そういつて天成はエレナの頭をそつと撫でる。その感触を楽しむようにエレナを目を閉じ、手の動きに合わせ頭を揺らす。目からは最後の雫を落とし、赤く潤んだ瞳で天成を見つめた。

「天成さん」

両手で天成の手首をそつと掴み、そのまま天成の掌を自分の胸へと押し付けた。

「え・・・え・・・と？」

突然の事に思考が停止しているも、掌だけは感触を楽しむようにもにゅもにゅ動かしている。

「本棚の本の奥にあった本に、こうしてる写真ありましたよ。まずは服の上からとかなんとか」

「おま・・・俺の秘蔵を見たのか」

あわてて天成は本棚を確認する。たしかに自分が並べておいた順番が変わっていた。

「天成さんはほんとに胸がお好きなんですね」

まだ知り合って間もない少女にそんな事をいわれ、顎が外れるくらいの衝撃を受けたような気持ちでいた。四つんばいの状態で天成のほうへゆっくりと近づいてくる。目の前でぺたんすとすわり、上目遣

いで天成を見つめる。

「ほんと天成さんの・・・エッチ」

「おま・・・それは・・・」

「はい、この本の63ページ」

エレナがどこからか取り出したピンク色のカバーの本を取り上げ、すぐさま本棚の奥へ押し込んだ。だがびつちり入ってるためなかなかうまく入っていかず、慌てている天成をみてエレナは笑った。

「なぜコレを持っているんだよ」

「天成さん、こーいうのが好きなんですよ？」

「いや・・・ま・・・その・・・。てかお前どうしてそんな冷静なんだ。普通お前くらいの年なら、顔を赤くして恥ずかしがるとか・・・なんでそんな冷静なんだ」

「それは・・・」

人差し指を下唇にあててウインクをする。

「禁則事項です」

「まだ見つからないのかね」

紺のスーツを着た黒髪をオールバックにした男は、ドンと机を叩く。手で顔を隠しやれやれと首を少しふりながら、手で払うように合図し黒服を下げる。

「もうしわけありません」

そういつて男の机の前に4人の少女が並び頭を下げる。黒服達への表情と一変し笑みを浮かべ、一人一人の頭を撫でていく。

「君たちが謝ることはない。君たちの目的は・・・あの女を殺す事。君たちはしっかりと結果を残した」

「今後は、私達もハーブを探せばよろしいのですね」

「理解が早くてよろしい。他の無能な学生と違って、君たちは優秀だ」

「何者かわからんが、能力者ではないなら・・・まずはスキルアウトどもに聞いてみなさい」

「はい」

そういつて少女達は一礼し、男の部屋を出て行った。

「くっくっく」

そういつて男はPCに映し出された映像を再生する。男の姿がはっきりと確認できる。

「風紀委員が割って入ったのか・・・。まあいい、とりあえず実践データを収集せねば。スキルアウトどもには悪いが・・・くっくっく」  
そういつて次の映像へ切り替える。この風紀委員が車をふっ飛ばしている映像が流れる。そして走り去っていく少女の姿も。

「エレナ・・・やっと私のもとへ。もうすぐ・・・もうすぐだよ。あの女はもういない。お前を守る者はだあれもないんだ」

暗い室内で薄気味悪い笑みを浮かべながら、手元の資料に記載されたエレナの写真をじっと見つめた。

「お前の脳を見たい。脳の中を見たい・・・お前は渡しの実験体<sup>モルモット</sup>。その能力で・・・私はAIM拡散力場の第一人者に」

そしてこの日からスキルアウト襲撃事件が始まった。

## S 8 目的（後書き）

ええ、そうです。今回もエレナの胸推しです。  
細身の体に巨乳は見栄えがいいのです。

この作品にはちょいちょいエロを入れていこうかと。

• そんなわけ回を増す後とにエロくなる、シンフォニストをよろし・

いえ、ちゃんとした話も考えてますから！

巨乳推しなんてあの漫画家みたいって思った人、俺大ファンですか  
ら

それでは次回あいませう

S 9 S e v e n t h m i s t (前書き)

グダグダ感が増しているような、シンフォニスト・・・  
第9話となりました。

## S 9 Seventh mist

「オマエ、それナンパされてんだよ」

校門の前で呆れ顔で目の前にいるエレナに言う。

「はい、わかってますよ」

そういつて微笑んだエレナの表情に、天成は小悪魔属性を感じずにはいられなかった。

「とりあえずお前の服でも買ってくか」

「はい」

そう言つて目を輝かせたエレナは、天成の腕に絡みつく。エレナが意図的になのか無自覚なのか不明だが、天成は悪い気はしない。のだが、周りの目が痛い。今はわりと真面目になったとはいえ、一時期はやんちゃなのは知られているし、しかも絡みついている女の子はどうみても年下に見える。しかも中学生に。実際にまだ中学生なのだが。

この二人が買い物とう外出しているのには理由がある。黒子たちが確認した捜索依頼は風紀委員にはおりにきていない。依頼をした学校側から事件性があるという事から、警備員アンチスキルだけでこの件に関しては当たっている。もちろん初春の力を持ってすれば、そんな情報も簡単に閲覧できてしまうのだが。まだこの時点では、二人はその事を知らないのである。

そんな二人は第7学区の洋服店、『Seventh mist』へ向かうことにした。この店には子供から大人までさまざまな種類の洋服が置いてある。黒子の派手な下着も、何点かはここで購入したものだ。ほとんどの学生や社会人ご用達なのである。

「今着てるのは俺のだから、ずいぶんダボダボだなあ・・・」

エレナと初めて出会ったときに来ていた学校指定の制服は、赤い血が染み付いていたため女将さんに預けている。その間の服として天

性の服を着せている。スカートは無事だったため、今はそれを履いている。

『Seventh mist』についた二人は、とりあえず下の階から見て行こうという事になった。様々な系統のシヨップがあり、エレナは目を輝かせている。天成は女の買い物には慣れているため、エレナに臆する事無くエレナに似合いそうな服を探していく。

「天成さんて女の人の服選ぶのなれてますね」

天成が選んできた服を試着しながら、カーテン越しに伝える。えーと、と言葉につまる天成は顔を引きつらせる。そんな表情はお見通しとばかりにエレナは笑う。

「あら、天成君じゃない」

試着室にいるエレナからは見えないが、天性にスタイルのいい女性が近づいてくる。

「あ、ちわーっす」

「今日は買い物？」

「そうですよ」

「もしかして・・・コレ」

そう言つて女性は右手の小指を、左手の人差し指でさす。慌てて天成は否定するも、入店時から見られていたため、こっそり耳元で「ずいぶん年下ね」とささやかれた。

「からかわないでくださいよ」

「あはは、ごめんね。これからもうちの店をひいきにしてね・・・お安くしとくから」

そう言つて天成にウインクして、別のお客の接客を始めた。

「相変わらずだなあ」

そういつて試着室の方へ向き直ると、カーテンからジトーっとした真一文字にほっそり開かれた目で、顔だけ出したエレナが天成を見つめていた。ものすごいドス黒いオーラが見えたのは言うまでもない。

「え・・・えと・・・エレナさん？どないしはりました？」

変な方言のような口調になったが、相変わらずエレナの表情は変わらない。

「天成さん、さっきの女性と仲よさそうですね」

そういつてぶいっと目線を天成からはずす。あきらかに拗ねているというのがわかるしぐさに、天成は苦笑いを浮かべた。

（こ、これはあれか？ やきもちという・・・あれか？）

「いやあ、ここのお店の店長さんだしね。何度も来てると・・・」

言いかけたところで、しまったと気づいたが遅かった。「何度も・・・何度も・・・」とぶつぶついい、ますます恐ろしくなるエレナに気づいた天成。

「とりあえず、服・・・試着はどうかね」

少し棒読みっぽくなったが、今の状況を打破するべくエレナに聞いて見る。やっぱり拗ねているのか顔はふくれているが、エレナはカーテンを開いた。黒の3WAY仕様のワンピース、中に黒のペチワンピースを着て、薄いグレーの少し透かしのあるベスト、前を開けて羽織っている。

「どう・・・ですか？」

さっきまで拗ねていた表情が、少し頬を赤らめ下を向いている。

「おお、すごく似合ってたんなー」

それを聞いたエレナはさらに顔を赤くさせて、勢いよくカーテンを閉じた。その後何点か試着したエレナは、着こなしを先ほど天成と話していた女性に教わり、一番最初に来たワンピース等に替えた。

「天成くんは、相変わらずね。かわいい女の子だしね」

「まあ、かわいいは認める」

「年下となんて初めてだから・・・あとでみんなに言っとくね」

天成がやめてという言う間もなく、「いらっしやいませー」と接客モードになっていた。

「こっご改めて見ると、お前・・・結構かわいいのな」

「ほんと？」

潤ませた瞳で天成に上目遣いで見る。

「おう」

そういつて頭をぼんぼんと叩くと、そのまま叩いた腕に自分の腕を絡ませた。

「さ、他のお店もみましようよ」

そういつてこの後もエレナの喜怒哀楽が激しかったのは言うまでもない。

S 9 S e v e n t h m i s t (後書き)

Wカップ見てるので、今後遅れるかもしれない。

サッカーおもしろいね・・・スペインいいよスペイン

しばらくはほのぼのな話が続きます。

それではまたー

S 1 0 標的(前書き)

ついになんとか10話になりました。

それでは本編どうぞ

部屋に乱雑に置かれた服を拾い集めつつ、布団でぐっすり寝ている少女へ目を向ける。この少女と一緒に住むようになってすでに2週間以上が経過していた。学校の事も心配だが、今のまま帰すのは非常に危険と考えまだ匿うつもりでいる。天成が住み込みしている酒屋の女将さんがいうには、家の事を手伝ってもらえるからこのままうちに居続けてもいい、なんて事を晩飯時にいうもんだからこの少女は目を輝かせながら喜んでいた。

「のんきなもんだ・・・つたく、着たもん位片付けろつてえの」  
『Seventh mist』でわりと大量に購入した服を、飽きもせずいろいろ組み合わせで一人ファッションショーをしているらしいと聞いていた。もちろん女将さんも娘が新しくできたって事で、女将さんもいろいろ買って着ては着せて見てるのだが。天成が学校ジャケットや風紀委員の活動をしている間は、もっぱら店の手伝いをしている。自分が狙われている事は理解している分、物分りが良いのはありがたい事だと天成は感じていた。

（いつまでも・・・このままってわけにはいかねーが）  
寝顔を見ながらそんな事を思っていると、天成の携帯が振動を始めた。もちろんエレナが寝ているため、起こさないようにサイレントモードで振動機能をONにしていたが、意外とうるさい事に焦ったがエレナは気持ちよさそうに寝息をたてたままだった。

「もしもし」

「天成さん、4人組の件ですが・・・」

電話越しの相手は淡々と天成に要件を伝える。

「わかった。俺の名前出してもそこから帰らないやつはほっとけ。」

「困にする」

「わかりました。彼も待機してますから」

「あれは忘れるなよ」

「はい、ちゃんと準備してありますよ」

「さすがだね、夏菜ななみ実上出来」

「い、いえ。それでは」

少し上ずったような感じの声だったが、天成が指摘する前に通話が切れた。それを確認した天成は携帯をテーブルの上に置き、先ほど集めた洋服を折り畳んでいく。気持ちよさそうに寝ている彼女のそばに置き、そつと髪をなでる。

「ちよつと行ってくる」

テーブルの上の携帯をとり、部屋の電気を消した。ドアを開けると雲ひとつない夜空で、月明かりが一段と明るい。さて、と気を引き締めて第10学区・・・スキルアウト達のたまり場となっているストレンジと呼ばれている場所へ向かった。

「なんだおまえら」

廃れたビルの中に座っていた三人の男は、目の前に現れた人影に視線を上げる。人数は四人、声の感じからすればまだ幼さが残る少女の声。その人物の一人から差し出されたのは、一枚の写真。明らかに隠し撮りと思われるアングルではあるが、はっきりと映し出されている。

「これは・・・」

「知っているのね」

「え・・・ん」

「はっきりしてほしいんだけど」

「タダでは教えられないなあ」

その言葉に、聞き飽きたと言わんばかりにため息を吐く。

「同じ事しか言わない・・・お前らは馬鹿なのか？」

男達はそれに対し頭にきたのか立ち上がり、男の一人が目の前の少女の胸ぐらを掴む。

「体に教え込まなきゃならねえなあ」

「何を教えてくれるのかしら？見た感じ馬鹿そうだけど」

その言葉を聞き男は少女を殴り飛ばした。実際には男の拳を手で受け止めたのだが、それには気づいていないようで、なにかわーわーと罵声を浴びせる。

「う・・・うっ」

男達は頭を押さえて辺りを見回す。

「なんか・・・聞こえねえか？」

「ああ、たしかに」

そして少女たちの方を見ると、まるで楽器を弾いているような動きをしている。その動きと共に、聞こえてくる音色もどんどん変化して行く。

「私を殴った・・・幻覚じゃなくて、直接消してあげるわ」

四人がそれぞれのパートで刺激を与える。四人のアンサンブルにより、AIM拡散力場が反応変化して行く。

「う・・・うわ・・・」

男たちと少女体の間に一つの質量をもった拡散力場が形成して行く。黒いフードをまとり骸骨の顔をのぞかせ、その赤い瞳に男たちを映し出す。そして手には死神の鎌デスサイスと呼ばれる鎌をもち、カシャンと音を立ててアスファルトの上に立つ。口からは白い靄を吐き、より恐ろしさや奇妙さを醸し出す。

「う・・・ああ・・・ああ」

この世にあらざるモノ、がくがくと震え出す体が言うことを聞かない。なんとか搾り出した言葉で、生きながらえようと必死にすがる。

「答える・・・答えるから・・・まっしてくれ」

掌を前に出しまっしてくれと体全体で訴える彼らに、呆れたように見

下しながら淡々と同じ問いを少女は繰り返した。

「こいつは最上<sup>もがみ</sup>。ここらへんじゃ剛拳のサイジヨウって言われてる」

「どこにいる？」

「ここだよ」

背後からの声に少女は振り返る。ビルの入り口に人影が一つたっていた。

「お前ら、もう逃げとけ」

少女の後ろで震えている男達に向けて言った。男達は「はやくはやく」と震える声で立ち上がり、少女からいそいそと離れるように走り出す。

「だめよ」

その少女の言葉の直後、上半身を無くした下半身だけが入り口へ向かって走る。うめき声を上げながら下半身を失った彼らは、その場でもがいているがやがて力をなくしそのまま肉の塊となった。下半身のほうも同じように地面に倒れていた。

「お前ら・・・」

目の前の行為に・・・無残な仕打ちに怒りを込めた敵意を少女達へ向けた。

「あなたが最上か」

その敵意を知ってか知らずか、たんとんと話す口調は相変わらずだった。

「剛拳のサイジヨウだ。ま、今は風紀委員をしてるんだけど」

そういつて腕をパキポキつとマギノギつと鳴らす。準備運動というように手首や足をぶらぶらさせる。最後に首を鳴らし彼女達にこう告げた

「風紀委員だ。ジャツジメント襲撃犯の容疑者として、お前らを拘束する」

「ハーブを返してもらおう。行け断罪者<sup>エクスキューショナー</sup>」

人間には出来ぬ動きで、目の前にソレは現れる。エレナに聞いていたものの、間近で見ると不気味さが余計に増して見える。勘が天成

を動かし自身を後方へステップさせる。と同時に鎌が振り払われる。天成がいた場所に横一文字にコンクリートの床に標を刻む。あと一寸遅れたら、切断された彼らの二の舞になっていたのである。うタイミング。カシャンという不思議な足音を鳴らし床に立っているも、移動時には浮いているような動きで、近づいてくる。

「ふうふう」

その剛拳の名にふさわしい隆々とした筋肉を纏う腕。今来ているTシャツがびつちりと彼のボディラインを描く。鎌の攻撃を避けつつタイミングを計る。間合いと呼吸を合わせ一気に飛び込む。刃の内側に入り込んだ天成は、そのまま人間で言う鳩尾の部分へ拳を叩き込む。人と同じように叩き込んだ威力によってソレは少し後方へ下がった。エレナの時もそうだが元となるのはAIM拡散力場、手ごたえはあるがなんともいえぬ感触しかないため、手ごたえがあまり感じられなかった。そもそもソレに打撃等の攻撃が有効なのかさえわからない部分である。カタカタカタと骸骨の口が音を鳴らしつつ、ふわりふわりと近づいてくる。鎌を振り上げた状態でじりじりとの間合いを計ってくる。完全に鎌に集中していた天成は横から伸びたソレの2本目の鎌に気づくのが遅れた。天成に向かって鎌の刃が向かってくる。

「1本じゃないのよ」

「くっ」

「夏菜実」

天成は叫ぶ。

「はい」

いつの間にか天成と横からくる鎌の間に割ってはいる。彼女は赤く黒く輝く右手を刃へ向ける。ドドンという音と共に右手から発せられた振動波が鎌の刃を受け止める。

「くっ」

天成めがけて鎌を振り下ろすも塚の部分を左手で受け取る。

「お嬢さんたち」

いつの間に少女達の左側に、Tシャツにジーンズというラフな格好の少年が立っていた。驚きで動揺を隠せない彼女達が見たのは、赤と青のオッドアイの眼。やがて両目が紫に変わる。

「いやあああ」

「やめてやめてやめてやめて」

おのおのが頭を抱え叫び出す。床に倒れのたうちまわり、眼は思い切り見開かれている。ひい、と視点が定まらず口が震えている少女。他の少女も似たように座り込んだまま叫ぶ。縮こまりおびえるように震える少女。それぞれが様々に、ただ怯えているのだけははっきりとわかる。

「煌・・・お前何 幻覚<sup>みせ</sup> たんだ？」

「一番嫌な事」

「煌君えげつない」

天成は肩を竦ませた。

「天成さん、この子達はどうしましょう」

やがて気絶したのか、おとなしくなった少女達をみて、夏菜実は天成に伺う。

「そうだな・・・」

携帯を取り出したところで、青い回転灯を光らせよく見る車が近づいてきていた。

「警備員か・・・」

三人は少女達をひきずりながら、建物の外へ出る。ちょうど目の前に止まった車から数名の警備員の防護服を来た者が数名降りてきた。話を聞くとちょうど警戒中だったらしい。ただその中に黄泉川愛穂は居なかった。

「こいつらが襲撃事件の犯人です」

そういつて渡した少女達を警備員が車へ乗せていく。天成は風紀委員として、現場状況の説明と遺体の処理等を依頼し、帰宅することにした。煌と夏菜実とは途中で別れた。

「とりあえず・・・ひと段落着いたか・・・」

そう思い見上げた夜空は、星一つ空一つ見えない曇り空だった。天  
成が抱いた一抹の不安を映すように。

やがてその不安は事態を最悪の方向へと動き出すした。

S 1 0 標的（後書き）

ちよつとバトルしてみました

これから面白く展開できるよつに頑張ります。

それではまたお会いしましょう

S 1 1 理性とモラルと欲望の狭間で（前書き）

今回はエロイです。

エロイので、苦手な人は飛ばしてください。

1 1 話目を見なくても1 2 話目は見えますから。

今回は1話完結です（笑）

「ただいまあ」

4人の少女達を警備員に渡し、これでスキルアウト襲撃事件も終わりをさせるだろうという安心感から急激に睡魔に襲われ、自宅へ帰ってきた天成は脱力でそのまま靴を脱ぎ床に倒れこむ。布団まではなんとか行こうと、そのまま下半身の動かし芋虫のように進んでいく。玄関についている窓から月明かりが差し込むが、部屋の奥へは届いてないので見えにくい。部屋の窓のところには厚いカーテンが閉じられており夜の外光をほぼ遮断している。同居人が寝ているのは知っているが、それより今日は布団で寝たい気分には襲われたので、こっそり布団へ忍び込んだ。いつもはたたみにタオルケットを敷いただけの簡易布団で寝ていたため、久々の布団に意識ごと吸い込まれるようだった。

ちゅ・・・ちゅ・・・ちゅば・・・

「ん？」

卑猥な効果音が聞こえ、皮膚や顔になんか触れられてるような違和感を感じる。眼を開けた先には一つの渓谷・・・谷間が。トップとアンダーの差が割りとあり、細みな体のせいで余計強調される。来ているTシャツがびっちりなのも有り、艶かしさが増して見える。少し開かれた部分から胸の谷間が顔を見せており、無意識にそこに飛び込んだ。柔らかな感触が両頬骨をやさしく受け止める。頭の後ろに回された手が、そつと何度も撫でてくる。谷間から脱出させ顔を上に向けると隣で寝ていたはずの同居人が微笑んでいる。そのまま体を下にならず同居人が自分の顔の位置までさがって視線が絡みある。そのまま唇を重ね、ゆっくりと舌を絡ませる。お互いの舌先で唇を刺激し、お互いの手がお互いの体を愛しく撫でていく。強調された胸に手を這わせ、呼吸と同じように一定のリズムで指を動かす。同居人の口から呼吸以外の声が小さく漏れる。感覚が高まり胸



じゃん？よく考えたら今まで付き合ってきたのって年上だし一番下でも同級生だよ。うんうん。年下に告白されることはあっても俺はいつも断ってたじゃん？それに煌みたいに幼馴染的な存在も居ないし、ましてあいつらは中学生同士じゃん？だから大丈夫なのであって・・・いやおかしい。どんなに疲れていても餓えていても、年下には何の魅力も感じないぞ。たしかに巨乳フェチの俺にとってはCカップは範囲外、Dカップ以上しか認めない。たしかにエレナのは細身の体がCカップ以上に魅せているのは否めない。確かにつんと張りのある胸だが、いくらなんでもそれはないそれはない。おちつけ、俺は・・・ってあれ鏡越しに見える体にある赤いのなんでしょう・・・。そうだよね蚊だよね、蚊が居たんだよね。痒くないけどさ。うん、そうそう結構昨日暑かったし、だからこの汗も納得いくよね。そうそうだって万が一にそんな行為はしてない。そう、俺の属性からすると絶対)

「天成さん」

(なくじゃちうちへべれけ)

突然背後から不適な笑みを浮かべ鏡越しに見えるエレナの顔が、にやりと笑っていて驚き以上に寒気を覚えた。

「オ、オオオ、オハヨウゴザイマシタ」

片言で体がガチガチになり、一気に思考停止状態までに達した天成は、エレナの胸元に見える赤い点に気づく・・・。

(お、おいおい。もしかして)

「エレナ・・・その赤いの」

その言葉にエレナは顔を赤らめて下を向く。そしてごにごによと何か言いながら、体をもじもじとさせる。その姿に天成はゴクリと喉を鳴らした。もちろん、悪い意味である。

「いっぱい・・・つけるんだもん」

「グハ・・・」

今までのどんなケンカより、能力者との戦いより威力のある一発を精神的に受けた天成は、一瞬どっかのジョーの様に真っ白と化す。

さらに追い討ちをかけるように腕に絡みつく。タオルケットを巻いてるとはいえ、谷間が腕を挟んで捕らえる。

「ちょ、ちょまって・・・」

その手を解き部屋のほうへと歩いていく。それを後ろから憑いてくるエレナが以上に怖い。今の天成にはエレナがこの世でもっとも恐ろしい人物へ昇格した。下着に足を滑らせ布団の上に倒れた天成は、慌てて振り返る。そこにはタオルケットの前を開かせ徐々に迫り来るエレナが見下ろしている。素敵なボディラインに胸が主張し、そんな事よりも今のエレナの威圧が半端なく、天成は押され後ろに後ずさりするも壁がそれを邪魔をする。

「捕まえた」

そういつてぺたりと天成の足の上に馬乗りに座る。足の上をすりながら近づいてくるエレナの感触がとても生々しく、さらに表情が中学生とは思えないほどの妖艶さを醸し出す。

「ま、まてまてまて」

いそいで枕元にあった自分の携帯を手に取り、電話をかける。

〜

頭の上から聞こえる着信音。直後「やべ」という声と同時に通話を切られる。天成はわなわなと振るえ再度同じ番号へ電話する。

「さ、サイジヨウさんどうも」

「やっぱりてめえの仕業か・・・」

今にも携帯を握りつぶしそうなくらい力が入るが、ギリギリで声を押し殺し堪える。

「てめえ、寝ている俺に幻覚ゆめ見せやがったなあ・・・しかも・・・かなりのやつを・・・」

「はっはっは、最初だけですよ。あとの行為は天成さんが自分からエレナちゃんに・・・あ」

(ん？かすかに聞こえた今の声は夏菜実か・・・まずいこんな状況は)

「天成さあん、責任・・・とってくださいね」

胸元で上目遣いでエレナが見つめてくる。

(やめろ・・・まぶしい・・・俺の穢れた魂が浄化させられる・・・  
み、みるなああ)

「はっはっは、最初だけですよ。あとの行為は天成さんが自分から  
エレナちゃんに・・・あ」

屋根の上でケラケラと笑っていた煌だったが、背後からものすごい  
殺気を感じ声が止まる。振り向かずとも頭の上にかざされた右手を  
感じ取る。これは相当に殺気立っている。背中の汗が尋常じゃない。

「えつと・・・」

「テンセイサンニナニヲシタ」

「ねえさん、片言やめてくだ・・・」

「3・2・1」

「ちょ、死んじ」

「0」

直後にドンという衝撃が空間を振動させるも、間一髪で横に飛び退  
ける。その後を夏菜実はおいかける。

「ま、これには」

「・・・」

「うわあああ」

天成の家のドアノブに手をかけるも鍵が掛かって開かない。その  
まま何度もガチャガチャとするも開く気配はない。そして近づいて  
くる鬼神。まさに彼女の異名『紅蓮の女王』にふさわしいオーラが  
見える。

「はじけるおおーノ瀬え」

ドンという音と共に天成の家のドアが振動の影響で外れ飛ぶ。急い  
で中に入った夏菜実は玄関の靴に躓き、そのまま部屋の中まで片足

ケンケンしつつ最後はエレナを押しつける形で天成の上に倒れこんだ。

「いたたた。はっ、すいま……」

天成の上に倒れこんだことに気づいた夏菜実は急いで起き上がろうとするも、天成のあれが目に入る。それをじーつと凝視し頬を赤らめる。

「これが……天成さんの」

なぜか忍び寄る手、その手をエレナが叩く。

「私の天成さんのに何しようとしてるの」

ギロリと睨みつける。それに対し目尻をひくひくさせ睨み返す夏菜実。ひくひくさせているところを見ると夏菜実は相当頭に来ているのがわかる。

「一度じっくり話し合わないといけないようね」

そういつて夏菜実は右手を赤黒く光を帯びていく。

「ええ、本当に」

エレナはAIM拡散力場を刺激し、反応変化させていく。そして暫くの間……

「はあああ弾けるお」

「覚悟お」

「ぬあああああ」

荒い息を整えるように何度も酸素を肺に送り、額の汗を近くにたたんで置いたタオルで拭う。そしてついでに体の汗も拭き布団からでる。規則正しい寝息を立てて寝ているエレナが隣に居る。

「あ、あれ？夏菜実は？戦いは？」

周りを見ても天成の手に絡み付いているエレナが一人。

「夢か」

ふうと安堵のため息を漏らす。べっとりと書いた汗を拭おうと、と  
りあえず台所へ向かう。顔を洗いこれからシャワーでもと思い、ふ  
と何気なしに体を見る。

「赤い・・・点？」

先ほど洗ったのに顔に汗が浮かび上がる。

（あれ？デ、デジャヴ？）

「天成さん」

「ひっ」

びくうつと身を竦めた天成の腰元に手が回され、エレナが抱きつい  
ている。よく見ると足が小刻みに震えている。

「足に・・・力入らないの。・・・責任・・・とってね」

「ぬあああああああ」

「えへへ」

天成の叫び声をよそに、幸せそうに抱きつくエレナの顔があった。

S 1 1 理性とモラルと欲望の狭間で（後書き）

はい、夢オチか現実かは、あなた次第です（笑）

とりあえず幸せか不幸かはわかりませんね・・・ふふふ

それでは12話でお会いしせう（笑）

S 1 2 穏やかな日常はいつも一瞬で過ぎて行く(前書き)

ついにワンクール目になりました(笑)

ここまで無事書くことができたのは皆様のおかげです。

この回はほのぼのとしています。

## S12 穏やかな日常はいつも一瞬で過ぎて行く

「天成く女の子と同棲してるってのはほんとか」

エレナは酒屋のお手伝い、といつても主に家事炊事洗濯と女将さんの手伝いをしているので、天成は平日は普通に学校へ登校してきている。いつもぼけーっとしている休み時間なのだが、今日はいつもと違って自分の席を囲むように数人の男子と女子が集まっている。

男は冷ややかな目、女子はキラキラと好奇心に満ちた目を輝かせている。まあ、いろいろ思うことはあるが、まず天成がしなければならぬ事・・・それは

「おい・・・誰の情報だ」

そう、この情報の源を知る事だ。一応笑顔を浮かべているが、それなりに付き合っている人間なら、その笑顔が仮面だということに気がつくだろう。

「それは・・・」

少なからず黒いオーラを感じた男子は言葉を詰まらせ目を泳がせる。そしてその視線の先には一人の女子、このクラスの中で女子からも男子からも好かれている女子が控えめに手を上げる。

「はい、それは・・・あたしなのです」

セミロングの左右の髪を一握りだけおろし、それ以外を耳にかけた女子がにやりと笑っている。悪意は感じないのだが、これは根掘り葉掘り聞かれるなという予感をさせる笑顔である。

「この間『Seventh mist』でみたんだ」

「よくやった三津草」

まわりのクラスメイトがひゃっほーと盛り上がる。そんなに俺の情報を知りたいのか、などと暢気に考えていたが、おそらく男子の目的はそこではない。

「どんな子だった」

そっちか・・・と半ば呆れ顔で三津草の話聞く。一部始終を見られ

ていたらしい。三津草は友達と一緒に来ていたので逃れようが無い。なんかいろいろ特徴を聞き男子が勝手に盛り上がる。そしてにやりとした目つきでこちらをチラチラと確認するように視線を投げる。

「な・・・なんだよ」

「・・・」

じろーつと数人の男子と女子に見られて居心地が悪い。まあ、なんとなく聞かれる内容が、想像できないわけではないが・・・、さすがに俺にそんな質問はしてこないだろうと高をくくっていたのだが思惑通りに行かないのが世の常。

「同棲つてことは・・・もうヤっちゃったのか？」

その一言で封印していた記憶がよみがえり、体にとつともなくぶつとい稲妻が落ちたような衝撃が走る。脳内で必死に記憶を処理し始めるがその心の声が外にまる聞こえだったらしい。

「いや・・・そんな事はない。だって相手は中学生だよ。だしかにもう15だし来年は高校生だし、そりゃ多少体つきもいいだろうけど。俺は年下よりお姉様属性だし、どちらかというとシヨップで働いているお姉さんとかが好みなわけで、*Seventh mist*の店員さんとは別れてからも今も友達というか微妙な距離感の関係を保ちつつではあるが、それでも年下はちよつと・・・でもやっぱリアルは夢でなく確実に現実・・・リアル・・・そんなわけで・・・はっ」

刺すような視線を感じまわりのクラスメイトを見る。男子は目と頬をひくひくさせ、女子は顔を赤くしながら両手で頬を押させて、なにかごにゅごにゅ言っている。

「お前ら・・・」

天成は両手をわなわなと震わせてゆっくりと席を立つ。その姿に異様な悪寒を感じた周囲の三津草を含むクラスメイトは・・・ゆっくりと後ずさりをはじめ教室のドアの方へと移動開始する。

「今すぐ記憶を消させるやー」

「きゃー」

「うお・・・逃げろお」

「まずは三津草・・・きさあまからだああ」

「やあだよ」

舌をぺろっと出し廊下を走り出す。負けじと天成もその姿を追いかける。しばらくダダダダと廊下を走る足音が響いていたが、授業開始ぎりぎりまで天成は教室へ戻ってきた。指をよきによき動かしながら不敵な笑みを浮かべ席に着いた。その数分後授業のチャイムが鳴ると同時によろよろと歩きながら、三津草は自分の席へついた。

「なあ」

隣の席の男子が「何をしたんだ？」とこっそり聞いてきたが、想像に任せると言つと「ちえっ」と再び視線を教科書へ戻した。

授業がちょうど半分くらいを過ぎた頃、ポケットの携帯が振動を始める。さっと携帯を取り出し画面を確認するとメールのマークが表示されていた。なんとなく送信者はわかっているが念のため確認する。先ほどの休み時間渦中になっていた人物・・・エレナからであった。

(了解・・・つと)

学校終わったら遊び行きたいとの内容だったため、授業中と言う事もあり簡単に返事を送信する。ふと自分がなんとなく笑っているという事に気づくと同時に、三津草を含め数名が天成の方を見て、ほくそ笑んでいた。もちろん次の休み時間も追いかけて回された三津草であった。

S 1 2 穏やかな日常はいつも一瞬で過ぎて行く(後書き)

天成の学校生活を書いて見ました。

まあ、授業風景はわからないので休み時間の短い間をね・・・

そして天成が三津草に何をしたのは・・・想像にお任せします(笑)

次回から急展開です お楽しみにね

S 1 3 天成を確保せよ（前書き）

ここからちよつと展開あります。  
ついに13話です。

S 13 天成を確保せよ

ビルの一角の扉を開ける。そこはソファやテーブル、机が数個にPCがその机分だけ配置されている。奥には給湯室等が見える。灰色の金属の棚は上半分がガラスの引き戸になっており、資料が綺麗に並べられている。ここは第7学区にある風紀委員の支部の一つ、一七七支部である。

「今日もがんばりましょう」

そう言つて頭に造花の花飾りをつけた初春飾利はドアを開けた。一緒に来ていたツインテールの白井黒子も中へと入る。

「固法先輩早いですわね……って、どうしたんですの？ 険しい顔をして」

セミロングにメガネをかけた女性、高校生の固法はPCのモニタを険しい表情で見つめていた。初春と白井も固法の後ろから覗くように、モニタの表示されているものを確認する。

「これって」

「ついに……ってことですかね」

後ろで呟く二人を他所に、固法は微動だせず見つめたまま……。

「最上君が……指名手配……」

固法はそう呟くとそのまま画面を下にスクロールさせていく。そこには容疑の内容が記載されていた。

「讚陽音楽学校中等部3年……三橋エレナの誘拐・監禁容疑。見つけ次第警備委員へ連絡せよ……」

暫く見つめた後、固法は席を立ち上がり入り口の方へ向かう。

「固法先輩？」

ポケットから携帯を取り出した彼女を、白井が制止に入る。

「いけません、固法先輩。それは風紀委員として、容疑者に情報提供は……」

「……ええ。そうね、ごめんなさい」

強く握り締められた携帯を再びポケットへとしまっ。

「これ・・・ちよつと危なくないですか」

初春はそのデータをさらに読み進めていた。

「抵抗する場合は銃器の使用を許可、エレナの身柄救出を最優先で書いてあります」

「銃器って・・・彼は無能力者ですわよね。何か・・・裏がありそうですわね」

「最近、スキルアウト襲撃も落ち着いたと思ったら、今度は同じ風紀委員を捕まえなきゃなんて」

「一体・・・どうなってるのかしら・・・。最上君・・・」

「どうしたの黄泉川ちゃん」

学校の屋上の作に寄りかかり、空を見上げながら電話の向こうの声に応える。向こうは学校の教員をしていて、同じように人目のつかない所から電話をしているらしい。いつもより声を抑え気味で小さい。

「どうしたじゃないじゃん。あんたに三橋エレナって子を誘拐した容疑で、アンタの確保要請きたじゃん」

「は??」

一瞬理解できずにいたが、すぐさまなんとなくの事態を把握する。

「エレナって子の搜索依頼は2週間前にきていたじゃん」

「ちよつと待て。一昨日の夜捕まえた4人の少女からとか、引き渡した警備員にエレナの事情とか説明したんだけど・・・何も聞いていないのか」

不安、嫌な予感が脳裏を過ぎる。

「何言ってるんじゃない。一昨日に警備員が出動なんかしてないじゃん。そんな報告も私は聞いてないし」

天成の予感は的中した。一抹の不安、それが確実になっていく。

(てことは、この間の警備員は・・・作磨の偽装か)

「おい、聞いてるじゃ・・・」

黄泉川の話が強制的に終わらせ、電話帳からエレナを呼び出す。

「出てくれよ」

急いで校内の階段を駆け下りる。教室に置きっぱなしの鞆は放置しそのまま下駄箱へ走る。

『ルスバンデンワニセツゾ・・・』

「くそ」

再度携帯が振動を始める。急いで出ると

「エレナか」

「はあ？何言ってるじゃん。さっき突然」

黄泉川は少しだけ声を荒げた様子で、少しだけ耳が痛い。

「ごめん、今はエレナが危ない」

「だからどういうわけか」

「黄泉川ちゃん・・・アンタに迷惑はかけない。・・・黄泉川ちゃん  
んは黄泉川ちゃんの仕事をしてくれ」

「お前・・・」

「ごめん」

そういつて天成は通話を切った。

「意味わかんないじゃん」

通話を切られ肝心の本質は聞かされず、通話の切れた携帯に向かって愚痴を漏らす。すぐさま別の番号からコールが鳴る。

「はい、黄泉川・・・三橋エレナらしき人物を発見した？・・・わかったじゃん。・・・ああ、いや確保は慌てるな。私が行くまで・・・  
そうだ・・・それじゃ」

電話を切った黄泉川は、一呼吸ついでその場を後にした。

「煌・・エレナが危ない」

エレナとの合流場所まで走って向かっている天成は、煌へ事情を説明していた。

「わかってますよ。こちらもその情報は手に入ってるんで、夏菜実ちゃんもすでに動いています」

「助かる。エレナは電話通じないし」

「了解」

「一つだけ・・夏菜実にも伝えといてくれ。もし・・・」

「わかりましたよ。その際はエレナちゃんの事は任せてください」

「ああ。最悪の場合は・・・」

「俺と夏菜実ちゃんは指示通りに動きます」

「それじゃ」

その後、再度エレナへかけてみたが、留守番電話の機械音が流れる。通話を切った携帯をポケットへしまい、エレナとの待ち合わせの場所へ向かう。店が集まっているモールのように開けた場所があり、自販機に軽食店が並び椅子やテーブルが綺麗に並べられているその場所へ。

同日15:45

野次馬等の取り巻き、黄泉川達警備員、そして白井達の風紀委員の中心に、天成とエレナの姿があった。

S 1 3 天成を確保せよ（後書き）

こんな感じでした。いに天成とエレナに魔の手が・・・

次回をお楽しみにしてくださいな

S 1 4 葛藤(前書き)

ついに14話です。

あえて言つとすると第一章?のラストスパートです。

「あ、もしもし」

女の子の明るい声が電話越しから聞こえてくる。まだ何も知らない、彼女はいつも通りの口調で。

「エレナ、今どこに」

「今はいつものモールの所って、息荒いね。走ってるの？」

受話器越しに聞こえる聞きなれた声は、少しだけ息が荒く短めのテンポで呼吸している音が聞こえている。

「ああ、ちよつとな。周囲に人は」

「んー学生がたくさん・・・あー、女の子観察する気なんですネ」

もー、と電話越しにすねる反応をしているエレナを、天成は電話でなだめる。また子供扱いしてー、とさらに口撃してくるが、天成の電話越しの様子から何かを感じたようで、

「なにかあったの？」

心配そうに問いかける。

「この間4人を警備員に渡したと言っただけど、あれは作磨の偽装・・・まんまと騙された」

「え？そんな・・・」

「今エレナを誘拐容疑で、俺にたいして手配書が出されてる」

「誘拐って・・・まさか」

「恐らく作磨だろうな。だから今日の買い物は」

そこまで話した天成は、最後の言葉はエレナの肩を背後から叩き

「無しだ」

そう伝えた。突然の声だったためエレナは肩を竦めたが、天成だとわかると体の緊張を解いた。そして手を取り走り出そうとしたとき、目の前には風紀委員の腕章をつけた少女が立ちはだかる。

「ジャケット風紀委員ですの。そちらの女性をこちらへ引き渡し、大人しくお繩につきなさい」

ツインテールの少女が腕章を示す。そして隣の、

「固法」

「最上君」

「それに……一七七支部のテレポーター空間移動の白井黒子とは……」

エレナを天成の服の裾を掴み、体半分身を隠す。それを守るようにエレナの体の前に天成は手を伸ばす。その二人を見る限り、明らかにエレナが天成を頼っていることが伺える光景。

「最上君、大人しく一緒に来てもらえないかしら。事情を説明して欲しい」

「こ、固法先輩……」

「白井さん、わかってるわ。だけど、どうみてもこの二人を見ると……誘拐というのは腑に落ちないし」

「それは……そうですね」

固法の言葉と考えている事は同じであるのだが、風紀委員という立

場上司務という事もあり、白井は固法と同じように行動しあぐねている。見るからにエレナは無理やりではなく、自らの意思で彼の傍に居るのは二人の目からしても明らかであった。

「固法・・・」

「今のあなた達を見ていたら、誘拐だなんて見えないもの」

そう言っただけ固法はゆっくりと歩き出す。天成は警戒は解かないものの、何もせずただ固法が近づくの待っている。白井もそれを止めようとせずその場で静止している。

「天成さん」

小さく、天成にしか聞こえないくらい小さな声で、エレナは呼ぶ。それに答えるように腕にそっと触れただめるようにさする。それに安心したのか、天成の服の裾を掴んでいる手が少しだけ緩んだ。

「最上君」

天成の前に来て少し微笑みを浮かべた固法だが、次の瞬間に天成は固法へ裏拳を放つ。

「すまん」

「え？・・・きゃっ」

当たり前こそしなかったが、固法は地面にお尻から倒れた。

「固法先輩」

その行為にすぐ様臨戦体制をとる白井だったが、直後に警備員の車

が道に停車する。車の中から警備員が降りて、天成達の前に隊をとる。

「最上天成……」

「黄泉川ちゃん……」

お互い顔を見知った仲。対峙するのはこれで2度目。

「誘拐の被疑者として……拘留する……」

「そうは……いかないんだよね」

天成は右手を指をゴキゴキと鳴らす。天成の戦闘前の準備であり、相手への威嚇でもある。

「エレナ……逃げろ」

「え……嫌だよ」

「言つたる？お前を守ってやるって……だから必ず助けに行くから、今はここから逃げろ」

「でも」

天成は顔を少し横にむけ、エレナへ視線を送る。

「わかった……必ずだからね」

「ああ」

エレナが走って行く音が徐々に小さくなる。それでもこの場はそれが最良の選択、天成はそう思っていた。しかし警備員は保護対象が被疑者から離れたとして、銃を構え照準を天成へと向ける。

（天成……お前は何を抱えてんじゃん。あの時みたいに……お

前を汚させたくないじゃんよ)

天成は掌を上に向け前に突き出し、手の関節をまげ指で相手を挑発する。何度も警備員へ向けて。

「ああ、これが気になるのか」

ポケットから出した盾のマークが入った腕章を放り投げる。ふわりと固法の前へと落ちる。それを手にとった固法は、なぜコレを投げた理由をなんとなく察した。

「固法先輩」

空間移動した白井が固法の体に触れ、警備員の後方へと移動する。辺りは警備員の後ろや横に野次馬が集まっている。集まっていると言っても警備員によって安全のため遠ざけられているが。

「無能力者（LEVELO）でしかも素手のやつ相手に、銃器とは軟弱な警備員だな」

「お前の実力は知っている。だからこれは当然の装備じゃん」  
「ふん」

じりじりと警備員は前へと進んでくる。少しずつ縮まる天成との間合い。

「いくらお前でも、警備ロボットもいれば隙ができる。だから大人しく投降するじゃん」

「それはどうかな」

天成はにやりと笑う。ふっと地面に1つの影が増え、上から警備口

ボットの上へと降下する。飛び込みのように頭をしたにしてロボットに対し掌を突き出す。

ドン

という音と共に赤黒く光る右手から発生した衝撃が振動を生み、その振動が警備ロボットにの物質内部から、膨大な熱量が発生する。まるで泡のようにぼこぼここと膨らんだ表面、やがてその熱によって警備ロボットは爆発する。それに連鎖しとなりの警備ロボットも不能にする。

「くっ」

「ま・・・まで、落ち着くじゃん」

ドタタタと銃口から連続で銃弾が発射されるが、先ほどと同じように右手を突き出し空間を振動させる。その振動により銃弾がすべて受け止められている。やがて加速度がなくなった玉は地面へとぼろぼろと落ちて行く。この能力者はフルフェイスのメットを装着し、ライダースーツに身をつつんでいる。

「天成・・・」

「この装備、武装なら・・・俺を簡単に捕まえられると思ったのかい」

天成は不敵に笑う。

その天成の後姿を物影から見ているエレナ。

その背後に卑しく荒い息をした男が、静かに静かに歩み寄って来ていた。

S 1 4 葛藤（後書き）

はい、どんどん天成とエレナは追い詰められていきます。

これも研究者と言う立場を利用し、現場には真実を告げらず警備員に風紀委員を無理やり動員させてます。

俺の描く木原とはまた別の雰囲気を感じていただければ嬉しいです。

S 1 5 予期せぬ別れ（前書き）

ついに15話です。

キリがいいので連日投稿です。

これで一つの区切りとなります。

あえて言えば第1章完了です。

S 15 予期せぬ別れ

「くっ」

「ま・・・まで、落ち着くじゃん」

ドタタタと銃口から連続で銃弾が発射されるが、先ほどと同じように右手を突き出し空間を振動させる。その振動により銃弾がすべて受け止められている。やがて加速度がなくなった玉は地面へとぼろぼろと落ちて行く。フルフェイスのメットを装着し、ライダーズーツに身をつつんだ能力者は赤黒く輝く右手を警備員の方に突き出したままその場から微動だしない。

「天成・・・」

「この装備、武装なら・・・俺を簡単に捕まえられると思ったのかい」

不敵に笑う。その笑みを黄泉川は一度見た事があつた。複数の警備員を前に、まるで楽しむかのように笑う天成。以前の方は両手を血で染め、まるで鬼のような。

「無駄な抵抗は止めるじゃん。いくらお前でも・・・銃弾は防げないだろう」

「あの時とは違う・・・銃弾はコイツがすべて打ち落とす」

「・・・あの時と・・・同じじゃんよ」

そう呟いた黄泉川言葉は誰の耳にも届く事無く、じわりじわりと警備員達が歩みを進める。ただ一人表情の曇った黄泉川以外、彼を拘束拘留する事になんの疑問も抱いていない。その分躊躇が無い。

「ん？」

自分に向かってくる何かを感じ取り、その方向へ天成は手をかざす。何かに触れた感触を感じた瞬間手を握る。手の中には小さなスピーカーの様なモノが手の中に……。

「天せ……きゃ」

聞こえた声は先ほどまで一緒にいた

「エレナ」

天成の顔が強張る。というより今までに無いほどの焦りを感じているような表情。

(天成……どうしたじゃん)

その表情に驚いたのは黄泉川だった。今天成の表情を初めて見た黄泉川は、さらに攻撃の合図をする事に戸惑いを覚える。

「君がこの子を誘拐していた最上天成かね」

見知らぬ男性の声。男の声の後ろから、口を塞がれた状態で声を上げているエレナの声が聞こえる。そして男は卑しげに声を発する。

「君のおかげで……この子は……いい女になった」

一層声をあげるエレナ。そしてその反応を楽しむように笑う男。

「てめえ……」

「今の君を見れないのは残念だが……、拘留所の中で悔しがるがいい。エレナを……手放した事を……な」

ブツと音声が途絶えた。そのスピーカを握りつぶす。その破片で手の平から赤い血が流れる。そしてその残骸を地面へ投げ捨てる。

「あいつに合流しろ」

天成は静かに……押し殺すように抑揚の無い声でライダースーツの人物へ告げる。少し驚いたように一瞬視線を後ろへ向ける。その表情は背筋が凍るほど冷たく恐ろしい表情。その表情を見るに耐えれず正面へ視線を戻す。

「いいから……行け」

一度だけ頷き、天成の方へ走り出す。能力者の牽制が無くなり警備員が二人を目掛けて照準を合わせる。しかしそれより早く天成が警備員へ向かって、唸りをあげつつ突っ込んでいく。

「うおおおお」

無能力者（LEVELO）だとわかっていても、今の接近してくる相手の表情から本能が後ずさりをしている。

パァ……ン

一発の銃声。放たれた銃弾が天成の右足に命中する。一瞬その衝撃と激痛によるけるもかまわず突進をしてくる。そして2発目の銃声。左足に命中し天成はこらえ切れず大勢を崩し地面に倒れる。

「うっ……ぐ」

足を痙攣させそれでも立ち上がろうとする天成の気迫、拘束に近づいた警備員を一瞬すくませる。

「うっ……おおお」

ゴツという音と共に、腕で地面を叩きつけた反動で体を浮かせ足を立たせる。ブシュッと銃弾の傷口から血が飛び出る。苦痛に顔を歪ませること無く咆哮だけで堪える。

「はぁ……はぁ……。悪いが……後ろへは行かせ……ぐっ」

一瞬で空間移動した黒子が、天成を上下逆さまに空間移動させ頭から地面へ叩き落とす。

「ぐ……」

黄泉川は、すかさず起き上がろうとする天成に近づきスプレーを噴きかける。

「な……よみか……」

くらりとなる体を手を伸ばし何かを必死に掴む。

「痛っ」

白井は痛みに顔を歪ませる。白井の腕を天成が今の最大の力で掴んでいる。100%の力じゃないにしても中学生の女子にしたら相当力が強い。

「た・・・のむ。・・・エ・・・レ・・・ナを・・・たすけ・・・たの・・・」

そこで意識が途絶えた天成は地面へついに力無く横たわった。目から流れた数的の涙。白井も黄泉川もそれが見えていた。お互いに歯がゆい思いを感じながら、それでも天成を車へ乗せる事を止める事はできない。拘留する前に病院で治療の必要があるため、まずは病院へ搬送・・・その後拘留施設へと搬送される。黄泉川は車へ乗り込んだ。この場を去っていく車を、白井はただただ見ている事しかできなかつた。

「離して・・・これを解いて」

研究所のような天井に球状の電灯。室内はコンクリートの灰色一触。中央にある台に寝かされ手足を四隅に繋がれ身動き1つ出来ない。近くには実験器具や機械が置かれている。頭に装着するようのコードがたくさんついたメット。注射器に謎の液体。香奈の担当になる前の事を思い出させる今の周囲の風景。少しだけ体が震える。その震えるのを必死で押さえるように下唇を噛む。そしてもう1つ気づけば、服が病院の患者が着る患者衣に変わっていた。

「やあ・・・気づいたようだね」

部屋に入ってきたのは白衣を着たオールバックの男。メガネのブリッジを中指であげる。一瞬キラッと電灯が反射する。

「さ、作磨」

目を見開きいろいろな感情がこみ上げてくる。しかし四隅に手足を繋がれ、手は握らされたまま袋を被せられて固定されている為、能力も使えない。

「ついに・・・私の元へ」

君の悪いニヤついた笑みを浮かべエレナの横に立つ。そのまま手をエレナの顔に添える。嫌がるように顔を反対側へ向けるも、指で耳を撫でられ体をびくつかせた。

「いい・・・反応だ。彼の元について・・・いい女になった・・・」

頬からゆっくり首筋へと指を這わせ徐々に下へと移動していく。やがて体のラインが徐々に山を向かえその頂上へ向けて指進める。

「い・・・いや！」

睨みつけるも男はただほくそ笑んでいる。やがて頂上付近へ近づくとその周縁に円を書くように指を動かす。それに対し体を時折びくつかせ、声を押し殺すが自分の意思とは無関係に体が反応してしまふ。

「だ・・・ああ」

山頂へ指をはじくと声をあげ一段と体をびくつかせる。そして左手は足先から腿へゆっくりと指を走らせながら、右手は山頂を攻める。エレナの反応を楽しみながら、じわりじわりと指を動かす。そして徐に腰の辺りで結ばれた紐に手を掛けた。

「うそ・・・やだ。やめ」

しゆるしゆると生地が擦れる音、そして完全に結びがとかれ不意にばさりと左右に患者衣をはだけさせられる。そのエレナを眺め彼は満足げな表情を浮かべた。

「ふふ、私好みだ。ふはははは、これからたつぷりと君を味わいつつ・・・お前を**実験**（いじ）してあげよう」  
「い・・・いや」

精一杯の声を押し出すも震えは隠せない。

「次第にあの男の事も忘れていくさ・・・」  
「やめて！それだけは・・・消さないで」  
「もうあの男とは会えないんだ・・・今頃は拘留されている。それに・・・この場所は誰にもわからないさ。はっはっはっは、はっはっはっはは」

「天成さん・・・助けて」  
「そうだ！助けを請え・・・その男を呼び続ける。そんなお前を落とすのは楽しそうだ」

そう言つて作磨は注射器等が置かれている台から1つを取り出す。真ん中に卓球球より少し大きめの穴が開いた玉を中心に、左右にベルトが伸びている。その左右の先にそれぞれフックと金属製のリングがついている。

「いや・・・ぶぐ」

玉を無理やり口に押し込められ、左右のベルトを頭の後ろに回されて、カチっという音が聞こえる。

「うぐう……うぐ……」

「舌を噛まれたらめんどろだからな。はははは、さあ楽しもうじやないか」

そう言っつて作磨はエレナの足の方へ移動した。

「う……う……う……う……」

両手足を動かしても頑丈に繋がれていてやはり動かせない。

(天成さん……天成さん天成さん……てん……せい……さんん)

気づけばエレナの目から涙がこぼれていた。それを見た作磨は、また一つ笑みを浮かべた。

S 1 5 予期せぬ別れ（後書き）

どうでしたか？

みなさんが思い描く結末だったでしょうか。

さすがにここでシンフォニスト完にはしませんからご安心を。

あくまでも第1章が完です。

現在は2章をちまちまと書いているので、いつ投稿できるかわかりませんが待っていてくださいな

それではまた

## 第2章 エピソードプロローグ（前書き）

予定はしてなかったですが、急遽作って見ました。  
第2章の導入部分です。

## 第2章 エピソードプロローグ

天成拘束から数日後

「おはようございます。作磨様」

幼さを残す顔に、似つかわしくない大人びたスタイルの少女。ベツトから起き上がり床に乱雑に置かれた服を取り、それに少女は袖を通す。

藍色の襟の部分に細かいフリルがついたブラウス、真っ白いフリル付きのエプロン、藍色の左右にスリットの入ったスカート、そのスリットから見える2段のパニエ、これが作磨と言う男の趣味なのかはわからないが、作磨と寝食を共にする際は常に着るように義務とされている。少女は異を唱える事無くただそれにしたがう。共に寝具の上にいるとき意外、彼女の声は抑揚が無い。まるで機械の様な、ただ彼に命令されるまま、彼女はただ行動する。

「ああ、おはよう。本当に、エレナ・・・君はいい女だ」

「ありがとうございます。作磨様にそう言って頂けて嬉しいです」

そう言ってエレナはベツトの上で上体を起こした作磨の首に手を回し、まるでそれが当たり前かのように作磨の唇に自分の唇を重ねる。何度も何度も重ね合わせ、やがて舌を絡ませる。一筋の輝く糸が唇を離れた二人の間を繋いでいる。

「さあ、今日も君を・・・いじらせてもらおうか」

「はい・・・喜んで。隅々まで私を弄り回してください」

「ふふふ、いい返事だなあ」

そう言つてエレナが差し出した手を取り立ち上がると、彼女の腰に手を回し寢室を後にした。

「はあ〜い」

明るいマイペースな女性の声が携帯のスピーカーから聞こえる。それに彼は答える。

「やあ麦のん、特定できたのかな？」

「麦のんて呼ぶな」

「はっはっは、気にしない気にしない」

「電話きるぞ」

「ほんとすいませんでした」

「ったく」

少しイライラしたような呆れた声がスピーカーから聞こえる。同じく彼の横に立っている少女も呆れた表情を浮かべる。

「探してるやつ居場所特定したから、電話切ったらデータ転送しとくわ」

「ありがとう麦野」

「いいえ〜、こちらも仕事手伝ってもらつて楽できたしね。あいつに、今度こそ勝つて伝えときなさい」

「おお怖い怖い・・・たしかに伝言伝えるよ」

「・・・ま、こっちも仕事があつて手伝えないけどさ。あいつに負けっぱなしは癪に障るから・・・それじゃ」

そう言つて通話を切つた彼の携帯にはデータが転送されて来る。

作磨さくま 義嗣よしつぐ

居住区：第十七学区

住居構造：地上2階地下1階

1年前より家を新築、地下への入り口は建築資料に記載なし。

「未確定・・・自宅に招かれた能力者が帰宅していない・・・」

「まさか・・・エレナちゃん的能力で実験を？」

「急ごう・・・、すべては天成さんを助けてからだ」

「ええ」

「まずは天成さんに関する情報を集めよう・・・。まずは一七七支部へ」

地下室から男性が階段を上りドアを開ける。それを彼女はただ見送るだけ、決して階段を登ろうとはしない。

「いつてくる・・・。いい子でまってるんだよ・・・エレナ」

「はい・・・作磨様。いつてらっしゃいませ」

エレナが深くお辞儀する。その姿に卑しい笑みを浮かべて作磨はドアを閉める。窓など一切無い人工的な明かりの空間が、今の彼女が住む場所。

彼女は決して口に出さない。

たまに見る、ここでは無い風景、暮らし。

脳が見せる電気的信号が生み出す幻にも似たもの。  
言葉で表せば

夢

知識では知っている月という明るい大きな衛星。

そこで笑う自分に、知らない男性。その横で同じように男性と女性が二人をからかうように笑っている。

そこに今の自分がした事無いような、見たこと無いような笑顔で男性に抱きつく。

それは作磨ではない・・・他人・・・

顔は見えない、声も見えない・・・。

だが彼女は立ち止まらない。いつもと同じ、作磨を迎える支度をする。

なぜならそれが・・・今の彼女のすべて・・・

今の彼女の・・・なのだから。

## 第2章 エピソードプロローグ（後書き）

こんな感じですよ。

彼女は記憶が無いんです。

作磨が何をしたか・・・だいたいわかりますよね？  
だって研究者ですから・・・ふふふ

S 1 6 二人の襲撃者（前書き）

おまたせしました16話です。

前回は導入部なので今回が16話になります。

## S 16 二人の襲撃者

天成拘束から数日後

「容態の方はどうなんじゃん」

わりと嚴重な警備の病室の前で黄泉川と蛙に似た医者は備え付けの長いすに座っていた。医者はカルテを捲りそれを黄泉川へと手渡す。

「両足の銃弾は貫通していたし、治れば後遺症もなく元通りだよ」

「そうか」

それを聞いて安堵した黄泉川は、ほっと背中を壁に預ける。

部屋のプレートには『最上天成』と書かれていた。部屋中央のベットには上半身を拘束服に身を包み鼻下まで完全に覆われている。手術後の足は包帯をまかれベットの端と鎖で繋がれている。シュー・・シューと呼吸音が室内に響く。

「術後の経過も安定しているし、搬送しても大丈夫なんだね」

「わかったじゃん」

そういつて医者は席を立ちその場を去って行った。黄泉川は煮え切らない曇った表情を浮かべていたが、医者からの搬送可能と言われたため、被疑者はすぐに施設へと搬送せねばならない。

「・・・つく」

しばらくその場にいた黄泉川は、ふらふらと立ち上がり本部に連絡を取った。そして今夜極秘に病院から搬送、拘留施設へと移される事となった。

黄泉川が本部へ連絡してから2時間後・・・

「これでスキルアウト襲撃事件も収束に向かいますね」

少しだけ声色を上げた初春はカタカタとリズムカルにキーボードを叩く。腰の高さくらいの棚を挟み、向き合った机にそれぞれ白井と固法が初春と同じようにキーボードを叩く。今回の事件の報告書を三人はそれぞれ作成している。しかし初春と違い二人はキーボードを叩く速度が遅い。もともと情報処理スキルは初春に劣ってはいるが、明らかに入力が進まない。ふう、と重い息を吐き固法はキーボードから指を離し、椅子の背もたれへと寄りかかった。

「やはり気が進みませんか？」

同じように白井もキーボードから指を離し、視線を固法へと向けた。

「ええ」

そういつてカップに入った牛乳を一口だけ口にする。ゆっくりとカップをまた机の上に置く。

「二人ともどうし」

ドオオン

突然の爆発音。ドアからではなく横の壁に見事に大きな穴が空いている。衝撃で吹き飛ばされた棚、粉塵が室内に舞う。固法と白井近くには床へ倒れこんでいる。近寄ってきた初春も部屋置くまで吹き飛ばされていた。幸いな事に吹き飛んだ壁の破片がほとんど無い。あっても小さい破片が散らばっていた。

「一体なんですか」

片手を頭に当てながら視線を上げる。大穴が空いた壁には2つの影が見える。

「あ、あなたたちは」

体を起こした固法は二人の人物に気づいた。

「最上君の・・・」

そこまで行った所で一人が固法の首に左腕をまわし、赤黒く発光した右手を固法の顔の横に添える。それを確認した白井と初春は身動きを封じられた。壁を壊したのがどちらの仕業なのか、さらに能力を使ったものなのか、相手の手の内がわからない。以前の経験から手の内がわからないうちは下手に動かない・・・それを固法は白井に教えていた。いつもであれば白井の空間移動テレポートで対処できても、今は固法が人質となっている。下手に能力を使用した際には、固法の安全に保障が無い。白井は歯痒く奥歯をギリッと噛締めた。風紀委員の支部を襲撃すると言うのは前例が無いが、セキュリティが反応している為警備員や他の支部から救援が駆けつける手はずである。

が、ここまで距離があるためまだ時間がかかる。最悪な事に今日は3人しかここにはいない。

「い、一ノ瀬先輩？」

初春は視界がはっきりしてきた室内、壁の入り口にたつもう一人の人影は初春が知っている人物。親友である佐天が唯一慕っている男性。

「初春の知っている方ですか？」

白井が初春の方へ振り返る。その表情は真剣そのもの。しかし焦っているのか緊張の色が見える。そして珍しく頬を、一筋の汗が流れ落ちた。

「はい。私と同じ柵川中学3年・・・一ノ瀬煌（煌）・・・先輩です」

一歩、また一歩と煌は初春の方へと歩み寄ってくる。鬼気とした何かに圧されるように、初春は体を少し震えさせる。それに気づいていた白井は二人の間に入り込むように立ちはだかった。

「こんなことして、どういうおつもりですか・・・う」

紫電に輝く煌の瞳を見つめ・・・そのままバタリと崩れ落ちた。まるで昏睡しているようにピクリとも反応せず、規則正しく呼吸している。

「し、白井さん？白井さん！！」

声量を強め呼びかけるも白井は反応を示さない。キツと睨みつけるように鋭くさせたため、煌に対して怒りを露わにする。

「一ノ瀬先輩・・・白井さんに何をしたんですか！」

煌に感じる恐怖で体や膝をガクガクさせるも、それを怒りで必死に押さえ込み立ち上がる。親友が慕う人のこの行為に戸惑いと怒りを感じつつ、初春は目に涙をためて必死に煌へ抗う。

「あ、あなたたち・・・こんなことして」

固法は彼らに訴えようとすると、

「わかっているさ・・・。初春さん、あなたの力をお借りしたい」

刺すような視線で煌は初春を見つめる。

「嫌だといつても」

「その時はあの女の頭を吹き飛ばす」

煌は視線を固法へ向ける。

「頼む・・・」

「う、初春さん・・・言う通りに」

固法の言葉に一度頷き、初春は複数台モニターのある席へと座った。

「何をすればいいんですか？」

「2日前拘束された最上天成の搬送の病院先、それと拘留施設への搬送の予定スケジュールと搬送経路を調べて欲しい」

先ほど入ってきたときの威圧感を感じず、言葉にも殺気を感じない。そのままキーボードを叩きネットへアクセスする。並々ならぬ速度で複数の画面を操作しさまざまな経路でアクセスして行く。

（進入経路がわからないように処置しながらこの速度・・・守護<sup>ゴールキ</sup>神<sup>イバ</sup>と言われているだけの事はあるな）

煌はそんな事を思いながら彼女の後ろからモニタを眺めている。

「わかりました、ここの病院です」

初春は病院の地図をモニタに映し出す。

「本日19:30に搬送スケジュールとあります。経路はこのマップに線を引いた経路です」

「印刷してくれ」

「・・・はい・・・」

ガーガガーとPCの横のプリンタから紙が打ち出される。でてきた数枚の用紙を手に取り確認をする。モニタに表示された情報すべての記載を確認し、初春にお礼を述べた。

「お礼より、白井さんを起こし・・・」

初春も白井と同じように意識が薄れていき机の上に体を預けた。天成はおもむろにPCの電源をとLANケーブルを抜きネットから強制的に遮断させる。共犯者と固法の方へ歩み寄り、紫電に輝かせた瞳で固法を幻覚<sup>ゆめ</sup>へと誘った。

「夏菜実ちゃん・・・これ」

そういつて手に持った用紙を手渡す。それを受け取り夏菜実は目を通す。

「狙うならここにしましょう。極秘だからおそらく1台だけで行動するはずよ。警備が厚いのは病院・・・移動中なら意表をつけるわ」

煌は頷き二人は空けた壁穴から外へと向かうが、そこに先ほどまで無かった人影が一つ。煌にはよく見知った相手。

「一体・・・何が・・・って煌ちゃん」

「涙子・・・」

佐天は立っている煌と倒れている初春達に交互に目をやる。徐々に戸惑いの表情を浮かべ煌へと再び視線を戻す。

「これ・・・煌ちゃんが？」

恐る恐る口にした佐天だが、頭の中では否定したい事実。

「悪い・・・涙子」

紫電に瞳を輝かせる。

「煌ちゃん・・・だめえ！」

その叫びを最後にゆっくりと重量に導かれる。床に落ちる前に煌は佐天を抱きとめ。ゆっくり奥のソファへと運んだ。

「心残りは無い？」

「ある・・・でも大丈夫」

そう言って煌は再び佐天の所へ近づき、頭を数回撫でた。

「唇奪っちゃえばいいのに」

夏菜実の言葉に顔を少し赤らめ、言葉をどもらせた。

「な・・・ば、馬鹿いつてんじゃねえ！そんなんじゃない」

「あら・・・そう・・・」

夏菜実はクスッと笑みを浮かべる。暫く佐天を撫でていた煌は決意したように

「さ、夏菜実ちゃん行こう」

「ええ」

二人が去った少し後に警備員達が駆けつけた警備員によって4人は病院へと搬送された。

4人が意識を取り戻したのは翌日の事だった。

S 1 6 二人の襲撃者（後書き）

すべての情報をかき集め、ついに彼らは行動を起こす。  
罪を重ねようとも、失いたくないものがある。

次回 とある科学の幻曲奏者 17話「脱走!!」

次回もサービス半額

はい、何も書くこと無かったので適当に書いてみました（笑）  
のんびりかいていきますわん

S 1 7 脱走！！（前書き）

お待たせしました。

結構空いちゃいましたね。

クライマックスまで駆け上がっちゃいましょう

## S 17 脱走!!

『ピー・・・只今高速を走行中。あと30mから1hにて施設へ到着予定・・・ピー』

『ピー・・・ガガガ・・・了解。予定通り ルートにて走行されたし・・・ピッ』

車内の無線通信を終えて、助手席に乗った警備員は端末から走行ルートの確認、それをナビへ転送している。

「交通状況に問題なし、もうちょい飛ばしても問題ないだろ」

すべての状況を確認し、それを運転席の隊員に伝える。平日の夜という時間帯もあり、高速道路はすいている。見える

のは前に数台のテールランプ。反対車線を走っているトラック等しかない。やがて前の車のテールランプも、高速道

路を降りたりし数が減っていく。最終的にはこの車の前には1台のテールランプがなくなっていた。

「これ終わったら、一杯やるか？」

「ああ、いいな。旨い居酒屋を」

ドン

壁にぶつかったかのような衝撃、運転席の二人はシートベルトはしていたため、頭をハンドルやダッシュボードへぶつ

かる事はなかったが、シートベルトで体を締め付けられる。

「うう・・・痛たた」

シートベルトをはずし外へと降りる。痛みで肩を押えていた二人はそれぞれ前に立つ人影に、反応が一瞬遅れる。構え

を取るまもなく顎に掌打。ヘルメットに防弾チョッキ等武装しているため、隙間に直接打撃を入れていく。一人は紫電

の瞳に幻覚ゆめを見せられ、一人は赤黒く発光した手より瞬間的に発生させた振動によりはじき飛ばされる。武装し

ているおかげで受身が取れなくても衝撃はやわらげられる。警備員がまだ生きているのは、彼女が手加減してい

るからなのだが。

「何も・・・」

起き上がるうとした警備員は、隣にいつのまにか立っていた彼に気づかず、紫電の光によって道路へ寝転んだ。

「よし、夏菜実ちゃん・・・ドア宜しくね」

「わかってるわ」

そう言って二人は護送者の後部席のドアへと歩いていく。

護送車の後部座席には、左右対面に数名が座っている。後ろからみて右側には警備員が3名。左側には、真ん中に拘束服を着せられた天成をはさむように警備員が、天成の左右に1名ずつ座っている。後部座席と運転席部分とは完全に切り離されており、乗り降りできるのは後ろの両開きのドアのみである。もちろん、外から鍵をかけるため内部からは決して開けることはできない。

走行中の車内では無駄な会話は一切発生しない。拘束された人物を不用意に刺激をしないため。能力者の場合であれば下手に暴れられると被害が大きくなる為の措置だ。中はタイヤから伝わる振動音と、車が切る風の音がこだまする。それぞれ警備員には最新鋭のライフルを携帯し、天成が暴れようものならいつでも速射できる体勢である。だからというわけでもないが天成はじつと、目を瞑りそれを待つ。

それ・・とは、タイミングだ。物事にはそれ相応のタイミングというものがある。不用意にタイミングを外せば、手痛いしっぺ返しを喰らうと共に絶対無二の好機すら逃してしまう恐れがある。天成は耐えた・・そして二人も耐えた。唯一の機会はこれ以外にないと把握している。そしてそれは訪れる。

ドンという衝撃音により、後部座席にいる警備員は全員進行方向へ体が流される。しかしシートベルトをしているため、席から転げ落ちるということは無いのだが。天成はそくぎに左足で床を蹴り体を支える杭にする。天成の右に居る警備員が勢いに流されて倒れてくるも、天成の体はまっすぐなまま。

前部席の両ドアが開かれる音が聞こえた後の交戦音。乾いた打撃音に人間の苦痛を漏らす声。ドンという音と共に、一つの声が遠くなる。そして外から音は聞こえなくなった。

車内が少しざわつく。誰が騒ぐでも声を出すでもなく、気配が鼓動がそれを感じさせる。接近戦闘、射撃訓練、警備員はそれなりに訓練を積んでいるだろうが今回のはそれとは違う。外が見えず状況もわからない状態での緊迫感。こればかりは訓練ではどうにもならないものでもある。

コンコン

天成の対面側の車体が鳴る。数名が銃を構え音の鳴った車体の方へ意識を、緊張を走らせる。しかしそれきり音が止む。こんな時は外が見えないこの車体は厄介である外の状況がまるでつかめないのだから。

コンコン

そして天成側の車体が鳴る。同じように銃口を構えるも、警備員が緊張している事を肌で感じる。天成は首を倒し、勢いよく車体を2度頭突きする。すぐ様警備員が銃口を天成へ向け詰め寄る。

「大人しくしろ・・・これは貴様の差し金か？」

警備員に問われるも、拘束服のせいで話すことはできない。だが警備員は詰め寄ってくる。つまり・・・余裕がない、と言う事を天成に教えてくれる。

「おい・・・お前」

ドドン

反対側の車体の外で衝撃音が走る。ぐらった揺れる車体。側面が沸

騰したかのように、ぶくぶくと小さい気泡が次々と表面に現れる。やがて気泡が次々と破裂するように車体に穴が空いていく。警備員達が見たのは赤黒く振動し揺れている空間、そして一人の少女。

「お前は何も……」

少女ばかりに気を配っていた警備員達は、その背後にいる紫電の輝きに気づく事無く全員そのまま床に倒れた。

「遅くなりました、天成さん」

そう言つて車内に入つてきた煌は、警備員から拘束服に着けられた服の鍵を取り順にはずして行く。口を覆っていた部分はずし、天成は大きく息を吸い込んだ。

「ふー。助かったよ、あー堅苦しかったぜ」

「こりゃあ、ある意味Mに目覚めちゃいますね」

「あほか……。それで……わかつたのか？」

「もちろんです」

そう言つて夏菜実は形態の端末を取り出す。画面に映し出された情報を確認し、天成はそれを夏菜実に返す。

「とりあえず服を」

そう言つと夏菜実は少し膨らんだバツクを天成へ放り投げる。

「さて……平穩を取り返しに行くか」

「ほーい」

「あとで麦野さんにお礼しないとですよ」

「げ……夏菜実、今は聞かなかった事にする」

三人は警備員を車両から全員おろし、その車を発進させる。

「あれ？天成さん……免許は？」

煌が恐る恐る天成に問いかける。

「煌、覚えてな。必要なのはカードじゃない……技術だ」

「それって……」

「そう、浜さんの教えだ」

「あっはっは、いい言葉だあ」

「天成さん、とりあえず……逆そうするの止めましょう」

三人の内夏菜実だけは、表情を引きつらせていた。

S 1 7 脱走！！（後書き）

最近は別作品を書いているので更新遅れてますが、  
ちゃんと完結させますのでご安心を

他の作品、とある科学の覆面武装〜マスクドライバー〜と、  
とある科学の〜組男女〜インターフェア〜も気が向いたら見てくだ  
さいね

S 1 8 最悪の再会 最愛の対峙（前書き）

ひっさびさの更新です。

それではどうぞ

大事な最初の文章が、ごっそり抜けていたので急いで修正しました。

## S 1 8 最悪の再会 最愛の対峙

手に入れていた情報から第十七学区にある、作磨さくま 義嗣よしつぐの自宅はすぐに判明した。

目立ちすぎる車を降り歩いて来たのだが人影が少なすぎて、三人でもかなり目だってしまう。

しかし家の電気はついておらずまだ作磨が来たく前だと考えたのだが、こつそり門から中をうかがうと車が止まっている。麦野から手に入れた通りの車とナンバーのため、すでに帰宅していると考えて間違いはない。

そして地上部分には居ないと察した。どのように忍び込むかを考え始めた矢先、今は一番聞きたくも無い音が聞こえる。自分たちが乗ってきた車と同じサイレンの音。青い回転灯の光が闇を照らす。

「まずい、警備員だ」アンチスキル

「もう気づいたのね。案外早いわね」

「ならさっさと忍び込むか」

「俺たちは二人で警備員アンチスキルを足止めします」

「なので天成さん、エレナちゃんを助けに」

そういつて煌と夏菜実は天成の方を向く。二人の思いを受け取り、天成は「ああ」と頷いた。

そして天成が前に拳を突き出し、二人もその拳に自分達の拳をくっつける。

「やばくなったら引け。すべての責任は俺がとる。万が一の際は、俺に脅されていたといっておけ」

「天成さん」

「ま、俺と夏菜実なら大丈夫ですよ。天成さんが終わる頃には全滅させてますから」

そう言った煌は不敵に笑う。割とこういうシチュエーションに燃えるタイプの様である。

同じく夏菜実も笑う。煌を鋭く細めた目で見る。

「あの子に会うまでは、捕まれないもんねえ」

「ちょ……、夏菜実ちゃんそれは言うなー」

そう言つて二人はサイレンの鳴る方へ走り出した。二人を見送つたあと、天成は家の門へと向き直る。

力を込め最大限にまで隆々とさせた腕で門を殴り飛ばす。拳が当たつた箇所がくの字に曲がり門が塀と繋がっている金具ごと飛んだ。

「さあて……久々に本気出しますか」

だが冷静に間取り図を確認する。地下室があるとの事だが間取り図には見当たらない。麦野達が調べに来た時も見つけることが出来なかった。もちろん調査のためなので能力を使ってまではしていない

のだが。木製のドアには機械式のロックが付けられている。ロックを無理やり開けたり壊したりすれば、自動的に通報がいくシステムになっている。

ただ今の天成にはそれはどうでもいい事だった。軽くドアをノックする。堅さや厚みをなんとなく推測する。走ってくる車をも吹き飛ばす天成の前では、木製のドアは紙にも等しい。一突きでドアをぶち破ると、遠くで銃撃の音が聞こえる。だが天成は振り向かない。彼らには信頼と言う大きな物で繋がっているから。

木製のドアをぶち破り中に入ると、室内は明かりがついておらず破壊された入り口から入り込む光だけが、ほのかに廊下を照らす。物音もせず人の気配も感じさせない。完全なジオラマの世界に入り込んだかのような間隔。

家財は存在しているのに、そこにあるはずの生活臭めいたものが一切感じされない。壁のスイッチを試しに押ししては見たが、カチとスイッチの音がするだけで実際には電気は付かない。

意識を耳に集中し研ぎ澄ましてみても、この家には生物の存在を感じられなかった。1階部分を一通り見てまわる。こんな時になんともなく用意していたペンライトが役に立つ。ライトに照らされたごくわずかな部分だけがはつきりと、天成の目に脳に情報をくれる。リビングのソファやテレビ、綺麗に配置されているがどれも使用された癖がない。

キッチンも最新式の設備なはずなのに、どれも新品同様……むしろ新品のまままで配置されている。学園都市では消音の最新の家電が販売されている。

天成は警戒をしつつゆっくり真ん中の冷蔵庫の扉を開く。案の定電気は通っていないらしく、開いた際のLEDの点灯も冷蔵庫機能も働いては居なかった。

「いつたいどこに……」

2階へ向かおうと階段の方へ向かうと、『ガチャ』という何かが外れた音が聞こえた。警戒しつつ歩を進めると階段の段と段の間から光が零れていた。

先ほどは気づかなかった……正確にはなかった隙間がそこに存在していた。かすかに臭う異臭、天成が嗅いだ事のある臭い……血の臭い。それらはその隙間から漂っていた。

「んふっんふふふ」

不気味な笑いを浮かべた男は、モニタに映し出された侵入者の姿を見ながらグラスに注がれたワインを一気に飲み干した。空のグラスを受け取った少女は、ボトルを傾け再びグラスを満たす。

「こいつが最後のテストの相手だ」

「この人が……最後……」

少女は少しだけ顔を曇らせたが作磨は気づいていない。

そんな事より彼の脳内では下衆な思考で埋め尽くされ、このモニタの男が愛した女に殺される……そんなストーリーを思い描き、またその逆のストーリーも描同時に描く彼は、再び奇怪な笑い声を発した。

万が一に記憶を取り戻したとしても、エレナの性格上自責の念にかられさらに心の拠り所の男がいなくなれば、精神は崖っぷちまで追い詰められる。その際に絶望へと手を差し伸べ本当に自分のものにするればいいと、作磨は計算している。

彼女に対して人間としての愛情はない。あるのは獣のような性欲、独占欲、研究欲といったものしかない。彼女に対し注ぎ注がれるという一般的な愛情とは程遠い位置に存在する。

モニタをみる作磨の背中をエレナは見つめていた。それは彼女に対しての愛情などではなくとまどい。作磨の為に動き、作磨の欲を満たすために存在している状況。

学生という記憶はあるものの、それ以外の記憶……香奈の事も天成の事も今は何もわからない。ただわかっているのは自分の脳内のメモリーに、もやが掛かっている部分があるという事。

だが、今のエレナは少しばかり動揺していた。睡眠時に脳が発する電気信号……つまり夢に出てくる男の姿がモニタに映る侵入者に重なる。そして彼を思うたびに頭痛が走る。少しその痛みで苦痛の色を浮かべても、作磨はそんなことには気づきはしなかった。

「では、彼をここに呼ぼうかね」

そう言つて目の前のあるパネル式のキーボードでコードを入力する。決定の為Enterのキーを押すと、部屋の隅の天井からガチャという音がなつた。

少しだけその部分が浮き上がり空気の流れが変わつたのをエレナは感じた。

ゆっくりと天井が上に開かれその先の闇の中からゆっくりと足が飛び出てきた。ゆっくりと階段を降りてくるその人物を見た作磨は、卑しい笑みを浮かべ喉の奥で笑い声を発する。

「久しぶりだねえ……、立派に脱走してくるとは恐れ入つたよ……クツクツク」

地下への侵入者は喉の奥で笑い声を鳴らす作磨ではなく、部屋の奥にこちらを見て立っている一人の少女へ視線を向けていた。階段を降りきつた所でその視線を作磨へと向けた。

少女へ向けているときと違い殺気だつた視線を……。それでも作磨はモニターの前の椅子に座つたまま動じることはない。かすかな光の販社で彼の前には透明な壁があるのを察知し、その切れ目を捜したが精巧で違和感の無い透明感に見つける事はできなかった。

「あなたが……最上……天成か？」

少女が抑揚の無い声で侵入者へ声をかける。作磨にはいつもどおり実験する時となら変わりない状態と見えている。しかし少女の目だけはいつも通りとは違い、少しだけ感情が波打っていた。

戸惑い……天成がこの室内に入ってきた時からずっと、少女は自分の中でわきあがる感情に戸惑っていた。いつもならなんの疑問も感情も抱く事は無かった。

抱くとしても自分が手にかけてしまった人間への追悼と後悔と悲しみを、だがそれが命令とあらば従うしかないと彼女は諦めていた。それ以外に術を忘れさせられた彼女には、正しい判断が出来ない状態にある。

だが、天成の場合は明らかに心ではなく体が硬直してしまう。唯一つ……『殺したくない』、作磨とずっと一緒に過ごしていると刷り込まれた彼女にとって、初めて作磨の言葉に対し反発している。

「俺が最上天成だ。わりいが邪魔をしないでほしい。俺はあの男をぶっ飛ばしに来ただけだから」

そういつてクイッと顔を作磨の方へ動かすが視線は少女から外さな  
い。

少女もその視線を正面から受けているが、それよりも今の自分自身との葛藤で視線などどうでもいいことである。

「さあエレナ。これで最後だ……これが終わったら二人でゆっくりしよう」

「はい……」

口の端を歪め、まるで女の取り合いに勝ったかのような表情を浮かべた。

実際天成は少しも作磨の表情になんの感情も沸く事は無かったが、目の前の少女の姿をみてふつつつと抑えられない感情が溢れては来ていた。ただそれをその原因の相手にぶつけられずに多少イライラを募らせていた。

「……………」

エレナは無言のまま指で奏で始める。指先で触れるAIM拡散力場を刺激させ、その振動が人の耳に届く際に音色を鳴らす。

とても綺麗な音に反し目の前には荒々しくも姿を現す白光の鎧に身を纏った人型のソレ。羽飾りの付いた株とは目元まで隠し晒された口元は微笑すら浮かべず、ただ無表情というマスクを貼られた人形のように。ソレらから青白く伸びた帯が、エレナの手元に集まりハーブの姿を模る。ふわりと髪の毛を揺らしゆっくりと地面に足をつける。

「久々だなあ、ヴァルキリー戦乙女」

その言葉に彼女は一瞬体を、思考を停止せざるを得なかった。

今まで相手にしてきた能力者は少なからず驚きなりを露にしていた。しかし、目の前の男は動じる事無くさらには自分の能力名までも言い当てた。

「エレナ……やれ」

途端に険しくなった作磨の表情。さすがの彼でもエレナが一瞬戸惑っている事は感じられたらしい。

その言葉にエレナは体を意識を無理矢理動かせる。綺麗で悲しい音を奏でながら、戦乙女は天成へと飛んでいく。

質量が存在していても操るエレナにはそれを感じる事は無い。感じることが出来るのは、それと対峙した相手のみ。腰に帯びた鞘から剣を抜き出し、天成に向かって戦乙女は一気に振り下ろす。寸での距離で刃を避けた天成はそっと戦乙女に触れた。

「やっぱり……不思議な触感だな」

床にめり込んだ切っ先、すぐさま刀を持つ右腕を天成のほうへなぎ払おうとしても右手はびくともしない。

「そ、そんな」

エレナはハーブで命令を奏でも戦乙女は動く気配が無い。作磨もそれにはあせった様子で、顔には汗を浮かべていた。

「こいつじゃ俺はたおせねえぞ」

そういつて力いっぱい握り締めた左拳で、戦乙女の右のわき腹へ叩き込む。ふわりと体を浮かせた戦乙女はそのまま透明な壁へとぶつかった。

壁がギシギシとなったが強度が高いのか、壊れる気配は無い。叩き飛ばすことは出来ても不気味な触感の戦乙女。大概ならば本気で天成が殴れば結構な痛みを生むはずだが、人間ではないソレは表情も動きも鈍ることが無い。

それに叩き込んだ天成は、今一つ実感を得られない。元はAIM拡散力場、もともと常識とは異なるものなのだから仕方がないといえは仕方がない。

「何をチンタラしている！！はやく殺せええ！！！」

声を荒げる作磨だが、エレナの操る戦乙女はいつもと変わらぬ動きで天成に攻撃をしかけている。

無能力者である天成だが全ての攻撃を寸でかわしていく。エレナの手の動きを早め激しく奏でて、ソレに合わせて天成も速度を上げる。焦りを覚える一方でなんとなく懐かしさをエレナは感じていた。

でもそれに値する記憶も無く、空白の記憶をいくら探っても今の彼女には何も見えては来ない。

(ぐっ……こうなったら地下室ごと爆発させるか)

作磨はゆっくりと気取られないように重い腰を上げた。静かに壁の向こう側への扉の方へ歩き靴の中に忍ばせた拳銃をこっそり死角になるように、左手で握り締めた。

その動きすら気づいていた天成は、エレナの能力の少ない弱点をつき動きを封じる。それに驚くエレナだが、必死にハーブを奏でても思った動きをしてはくれない。

「ど、どうして？」

「こいつは、AIM拡散力場を刺激して質量を持たせた存在。でもその実は、お前のハーブから伸びる帯が振動を伝え動かす操り人形だからその部分を押さえ振動を少しでも遮断すれば、俺でも簡単に動きをとめらるって事さ。それに各部分を動かす際に、いろいろ指で奏でているがどんな動きをするのかは、特定のパターンがわかっているからある程度は予測できる」

その言葉に一瞬動きが止まったエレナの距離をすばやく詰め、鎖骨あたりを掌底で天成にしては軽く押す。

それでもエレナくらいの子なら軽々と後ろの壁と衝突する。

（まあ、このパターンも…お前が教えてくれたんだけどな）  
「ぐっ……」

壁と衝突したエレナは苦しそうな声を漏らし床に座り込む。

二人のやり取りの間に透明な壁の向こうから出てきた作磨は、左手から右手に持ち替えた拳銃を天成に向けた。

少なからず動揺しているのか、銃口がふるふると震えている。向けられた拳銃に臆する事無く天成は、作磨の方へと振り向いた。

「こいつは返してもらっぜ」  
「ヒッヒッヒッヒ」

人間以上になつた君の悪い笑みを浮かべ、執拗に笑い声を上げる。

それにうんざりした天成だったが、その笑みの理由に気づいた時にはすでに手遅れだった。不気味な触感が左の背中から皮膚を肉を貫き、左の腹から姿を現す。細く白光した鋭い刀。自分のと思われる赤い液体がその刃に付着していた。冷たくも熱くもない不気味なそれは、そのままゆっくりを引き抜かれてた部分からどっぴりと赤い

液体が床へと流れ零れた。

S 1 8 最悪の再会 最愛の対峙（後書き）

行間を細かくして見ました。見安くなりました？

ラストを一話に使用と思ったら、長くなったので分割しました。

S 1 9 あの日から……（前書き）

さてさて前回刺されちゃった天成です。  
さあ本編じつぞ

真っ白な天井。室内がすべて白一色に統一されていて、窓から見える空が青く映える。

違和感の覚える右腕を見ると、肘の反対側から管が伸びそれが医療用の点滴の袋へ繋がっていた。どれだけ寝ていたのだろう体をだるさが包むような感覚。体を起こそうにも左わき腹当たりに痛みが走り、その行動をやめ体重をまたベットへ沈ませた。

記憶を辿ろうにも途中で途切れているため、今のこの状況では何もわからない。記憶に残っているのは、発光する刃に体を貫かれた事。そしてそれを見下ろす、憎らしいまでの歪んだ笑みを浮かべた作磨の表情。そこで天成の次の記憶は今さつき見た白い天井に繋がっている。まるつきりぽっかりと時間が抜けてしまっていた。

静寂、病院という事もあり外から入ってくる車の音以外の音はあまりない。備え付けられたテレビはあるものの、特に見たい番組もないがそれより今はあまり身動きがとれないため、テレビを付けられないというのが正解だ。

廊下からはたまに、キュッキュやパタパタといったナースや患者のサンダルの音が聞こえてくる。時たま固い革靴のような音も聞こえてくるが、お見舞いか医師のどちらかであろう。

一度だけ時計に目をやり、天成はゆっくりと目を閉じた。

次に目を覚ましたのはそれから2時間後。部屋のドアが開かれる音で天成は目を開けた。

「よう」

天成が声をかけた先には、煌と夏菜実が二人並んでいた。

「心配しましたよ」

ほっとしたのか、少しだけ顔の表情を緩めた二人は、ベッドのそばにある椅子に腰をおろした。

「心配かけて悪かったな。それで？見舞いの品は……」

天成が二人の手元足元をみても、二人の通学用の鞆しか見当たらない。

「冗談が言えるなら、もう大丈夫そうだね？」

二人以外の低い声、部屋の入り口から白衣を着た医師が姿を見せる。天成にとっては馴染みの蛙に似た医者。

「また…あなたの世話になっちまったな」

天成は自分に対する皮肉を含めて苦笑いを浮かべた。結局エレナは一人では助けられず気づけばベットの上にいる自分に対して……そしてゆっくりと視線を二人に戻した。

その視線の意図を察した二人は、あの日の事を話しだした。

刃が体から引き抜かれ、赤い血が床へと流れこぼれた。それにより体の力があつというまに抜け、天成は前のめりにそのまま床に倒れた。

ドン……天成が床に倒れる音を掻き消すように、この部屋への唯一の入り口である階段の部分がぶちやぶられ、破片が階段を転がり落ち床にバウンドした。

その異常な状況にすかさず作磨は、視線と手に持つ拳銃の銃口をそちらへ向けた。エレナの方を一瞬確認すると、声に出ない悲痛の叫びを漏らしつつ天成の体に触れていた。

作磨がエレナを使えないという答えを見出すには十分な状況であった。しかし次の状況が作磨に最悪の展開を認識させる。完全武装された最新鋭の装備を持つ警備員<sup>アンチスキル</sup>。それら全員が持つ最新鋭のライフルの銃口が作磨を捉える。

「作磨さくま 義嗣よしつぐ、拉致監禁……それと」

ゆっくりと階段から降りてきたのは、長い髪を後ろで一束にまとめている女性。その手には白い紙のようなものを持っており、その紙の上部に黒く太い字で令状と書かれているのがはっきりと作磨の目にも入った。

「ここにはお前の犯した罪の全て、貴様を連行する」

その言葉を合図に、ゆっくりと警備員アンチスキルが包囲するようじりじりと間合いを詰める。

「うがああ！死ねえ」

銃口をエレナの方へむけ、一気に人差し指を引く。しかしそれよりも早く赤黒く光る手が拳銃を捉える。ドンという音と共に、物質内部より高温を発しその熱で銃弾に含まれる火薬が反応し、作磨の手の中で暴発した。激痛に身をよじる作磨に対し、黄泉川は「確保」と力強く合図を出した。

最後まで抵抗の心を折りはしなかった作磨だが、大人しく両手を差し出し警備員に手錠を掛けられた。その手は固く握り締められており、作磨の感情を代弁していた。ギリギリと骨に響く歯軋りと、感

情をあらわにした作磨の目はエレナと天成をじつと睨みつけていた。その視線に気づいた黄泉川はその視線の先にいる二人に目を配る。だがそこで驚いたのは、左わき腹から血を流している天成がゆっくりと立ち上がった姿を見たからだ。ふらふらとした足取り、脳の支配下での動きではない。

まずい……

そう直感的に判断した黄泉川は、急いで天成に向かって駆け出すと同時に天成も作磨へ向かって駆け出した。

ブチブチという音を鳴らし握り締められた拳を振りかぶり、作磨の顔めがけて突き出す。

「天成！！」

急いで腕に飛び掛るも完全に威力を止めることは出来ず、ゴツという鈍い音を立てて作磨は壁に顔面を強打した。『ひいい』という悲鳴をあげながら、黄泉川の合図で急いで上の階へと連れ出された。その姿を目の端で追っていた黄泉川は、不意にのしかかる重さで床に体が吸い付けられそうになる。掴んでいる腕の方を見ると、天成は再び力をなくし床に倒れた。その腰元を虚ろな瞳から涙をこぼしている少女が、両手を回し抱きしめていた。

「そうか……んで、結局黄泉川ちゃんの方で作磨の方の悪事を暴いたって事か」

「そうです。その事を、二人で足止めしようとした時に聞かされたので……」

「最初から、協力してもらえばよかつたな」

「まあ、みんな無事だったから良いじゃないの」

天成は、喉の奥で『クツクツ』と軽く笑いながら窓の方へ視線を向けた。

「エレナはどうした？」

「ああ、それならね……」

そう言って蛙に似た医師は、天成に松葉杖を差し出した。

真っ白い部屋の中心に置かれたベッドの上で、少女は上体を起こしたまま窓から外を眺めていた。

入院する前の数ヶ月の間の記憶を失っていて、なぜ自分がここに入院しているのかもいまだ謎のままだ。特に薬を飲むわけでもなく、定期的に機械で脳はをチェックするくらい。入院してすでに1週間が経過していた。

何をするわけでもなくほとんどをこの病室で過ごしている。入院してから1日1回は家族へ連絡をするために、公衆電話に行くくらい。病院の為さすがに携帯の電源は落としていた。

コンコンとドアを叩く音が聞こえ、反射的に『どうぞ』と答えるとスライド式のドアのが開く音が聞こえた。だがドアを叩いた人物の姿が中々見えず、少女はなんかのいたずらかといった考えが一瞬頭をよぎったが、ゆつくりとした動きでその人物が顔を出した。松葉杖を使いゆつくりと。

「え…と」

「どうも、隣の病室に入ってるので挨拶周りに」

同じ患者衣を着た男の姿。知らない人から見たら、髪の色や風貌から不良と認識されそうな男だが少女は特に警戒せずベットの横にある椅子を案内した。

「とりあえず座りますか？」

「お、おう。ありがとうございます」

ゆつくりと起用に歩いてくる男は、椅子の前まで来ると苦痛を顔に浮かべながら椅子に座った。その表情にクスッと笑った少女を見て男は少しだけ苦笑いを浮かべた。

「無理しなくてもいいのに」  
「ま、まあこれもリハビリってやつ」

額に浮かぶ汗で彼が相当やせ我慢しているのを感じた少女は、松葉杖をささえる左手にそつと自分の手を添えた。

「不思議……初めてなのになんだか安心する」

微笑んだ少女に、同じように微笑を返す。この病室に来る前に蛙似の医師から彼女の症状を聞いていた。

一時期間の記憶喪失。薬物による負担と精神的負担により脳がもつとも苦痛を感じた期間を、防衛本能で脳が記憶の奥底へ沈めてしまふ。どっかの少年の記憶破壊とは違うため、記憶が戻ることもあるが戻った記憶に少女が耐えられるかどうかが不安と医師は言っていた。

気づけば1時間ほど少女の部屋で話し込んでいた青年は、再び苦痛に顔を歪めつつ松葉杖を支えに立ち上がる。

「これから検診なんだ」  
「そうなんだ」

少女は少し残念そうに表情をすぼめる。そんな少女の頭を掌でそつと撫でた。その青年の手を少女の両手が包む。まっすぐな輝きの瞳

で青年を少女は見つめた。青年もその視線を外す事無く少女を見つめ返す。

「名前……名前はなんていうの？」

「俺は、最上天成だ」

「あたしはエレナ。三橋エレナよ」

エレナは笑う。

「また…会える？」

「隣なんだから、遊びに来たっていいぜ」

「……はい」

エレナは天成の手をそつと離し、少しだけ名残惜しいようなそんな感情を胸に抱く。天成はゆっくりとまたドアの方へと歩みを進めた。その姿を見えなくなるまで追っていたエレナは、ふと窓の外へ視線を移した。少しだけ病院の生活が楽しくなりそうと感じたエレナ。

窓の外に見える澄んだ青空のように、少しずつ彼女の記憶も澄みだす様に。脳はゆっくりと記憶を引き上げる。彼女の準備が整え終わるまで、ゆっくりと…ゆっくりと……

S 1 9 あの日から……（後書き）

どうでしたか？

突然ですが、次話が最終回です

……てへっ

S20 始まりの季節（前書き）

はい…！

最終回です

どいどいー

## S20 始まりの季節

穏やかな風が街を駆け抜け、桃色の花びらが風に乗って舞い踊る。エスカレーター式の学校以外は、新しい制服に袖を通し新しい学校生活を迎える学生。1年学年をあげた在校生はクラス変えに気持ちを高まらせたり、新入生のチェックを始めたり。

最高学年へと進級した彼、最上天成は眠たそうにあくびをひとつすると新しい教室へと入る。ジャッジメント風紀委員をしているため、天成の事をほとんどの生徒が知っている事もあり天成は別段浮かれる事は無い。

「よう最上。またよろしくな」  
「おっ」

前学年の時同じクラスだった生徒も、数名今年も同じらしく天成の姿を見つけては話しかけてくる。

「や、天成」  
「げ……お前とまた一緒かよ」  
「あらあ、ずいぶん言い方。照れ隠しって事で受け取っておくよ」  
「まったく三津草に関わるとろくな事ねえからな……」  
「へへ。本人を目の前にしてそうということ」  
「さーせん!!」

あまりの迫力に即座に謝罪を述べ何とか事なきを得た天成は、ほっ

とため息を一つ吐いた。

「おい、新入生見たか？」

「おう見た見た。すげーかわいい子居たな」

「お嬢様っぽい雰囲気だったな」

クラスの男子がそんな話で盛り上がりを見せるのも、新学期ならではの光景である。新入生の入学式は午前中、在校生の始業式は午後という日程で行う学校の為、わざわざ早めに来て新入生を…主に女子を見に来ている好き者も居る。

「平和だなあ」

そんなのんきな事を考えながら、教室の窓から空を見上げた。雲が気持ちよさそうに泳ぎ吸い込まれそうな青空を見ながら、一人の少女の事を思う。

（あいつとまた一緒に暮らすようになって、無事に学校も進学出来たみたいだし……今日帰ったら祝ってやるかな）

入学式も終わり、新入生達は新しい教室に新しいクラスメイト…そ

して担任と簡単な自己紹介を行っていた。この時間は在校生が始業式を行っている。午前中に入学式を終えた新入生は、簡単な時間割カリキュラムや細かい校内の情報を担任から配布されたプリントを見て確認していた。

「はい、それじゃあ明日から授業が始まるから、入学早々から遅刻するなよ」

そういつて簡単なHRが終了し担任が教室から出て行った。それと同時に少しずつ各教室のざわめきが少しずつ大きくなる。まだ初めてのクラスで、同じ中学校出身の子もいない少女は静かに席を立ち教室を出た。彼女のいなくなった教室では、彼女事を少しだけ話題に上げた。特に男子のグループでの話題だが。

そんな話題など露程も知らない彼女は校舎の階段を上へと登っていく。1年生は1階、2年生と職員室は2階という風に上に上がるごとに学年が上になる。彼女は2階をも通り過ぎ3階へ足を進めた。

リボンの色で学年を判別できるこの学校の制服。3年の生徒はその中で一人リボンの色が違う異質な存在を徐々に目で追う。その少女はちらちらと教室のドア付近から教室内を覗く。目的の何かがなかったのか少女は隣のクラスへと移動した。

校舎には2つの階段があり、階段の両端に2教室配置され階段と階段の間には3教室配置されている。

少女はちょうど真ん中の教室のドアから室内を覗く。そして窓際の列から一つ隣の列の最後尾に、目的の人物を発見した。周りの生徒

の視線など気にも留めずその人の傍に歩み寄る。

ポチポチと携帯をいじっていた生徒は、クラスのざわめきが少し大きくなったのに気づいたが特に気にする事無く携帯のボタンを操作し、最後に送信を決定するボタンを親指で押した。そこで改めで隣に人が立っている事に気づいた生徒は視線を移す。

ミニスカートから伸びるバランスの取れた引き締まった太もも、細いウエストに少しだけ強調感が強い大きさの胸、その胸元には今年の新入生を示す色のリボン…そして……。

「エ、エレナ？」

予想もしていなかった人物の登場に彼、天成は顔を引きつらせた。

「お前……今日入学式って……」

「そつだよ。今日からここの生徒よ」

「そんな話し…聞いてないぞ」

エレナはにっこりと微笑んだ。

「知らないのは天成さんだけですよ」

「なんだとおお」

天成はガタツと勢いよく立ち上がった。このとき初めて周囲を見渡したが、視線が一気にここに集まっていることに気づいた。

「家でも学校でも……よろしくね」

「おまつ……」

今のエレナの発言に、クラス内での反応が特に大きくなる。

「家でもってどーゆーことかなあ？」

「やっぱ天成は進んでるってことか」

そして一際嫌な視線を送っているのが、去年も同じクラスだった女子……三津草の視線である。口元に軽く手をあて楽しそうににやついている。

「天成さん、今夜も……寝かさないぞ」

『ぬおおおおおお』という学校中に響き渡った天成の叫びを聞きながら、エレナは小悪魔のような笑みを浮かべた。

「デヘッ」

エリナはこれからの学校生活を思い喜び、天成はこれからの学校生活を思い肩を落とした。

二人はまだ始まったばかり……。

## S20 始まりの季節（後書き）

あっはっは、グダグダっぽい感じ満載ですけど（笑）

これにてシンフォニスト完結です。

ご愛読いただきましてありがとうございます

簡単なキャラ設定 へ手抜きでごめんな へ（前書き）

ご希望を頂きましたので、簡単に作成して見ました。

浅く軽くな設定でごめんなさい。

簡単なキャラ設定　く手抜きでごめんね　く

三橋エレナ みつはし

能力名：A I M奏手 ハーブ

通称・別名：幻曲奏者 シンフォニスト

A I M拡散力場を刺激し、それにより騎士や死神、猛獣を具現化させる能力。もちろんそれに奏者が触れる事も乗ることも可能。具現化させるモノは、奏者の心理状態により変わる事もある。基本あまりかわらない。

A I M拡散力場を刺激する際に、伝わる振動が人の耳に入るときに音色や曲として認識されるため、まるで曲を奏でているように聞こえる。

本来は聞こえるはずの無い幻の曲を、奏でているため幻曲奏者 シンフォニスト という名称で都市伝説とされている。

最上 もがみ　天成《天成》

通称：サイジヨウ　一（荒れていた時期の通り名）

無能力者。酒屋に住み込んでいる高校2年生。成績は優秀だがよくサボるため1度留年している。現在18歳

昔からケンカばかりしているのと酒屋で手伝っているため、引き締まった肉体にしっかりと筋肉を纏っている。一撃で相手をノックアウトさせるほどの豪腕をもつ

乗用車クラスなら突進されてもぶっ飛ばす。

モデルは天上天下の依文七様（笑）

一ノ瀬 煌いちのせ せい

柵川中学3年生で、佐天涙子とは小学校時代からの知り合い。

相手に幻覚を見せる能力者でレベル3。能力発動時には瞳が紫電の色に変わる。

正体は虚数学区と人間のハーフ。ベースは人間だが虚数学区の影響で、自己再生能力が高い。

また影響は再生能力だけでなく身体能力も高く、常人を軽く越えている。

とある事をきっかけに天成を慕う。

モデルはゲットバツカーズの御堂 蛮

皇 夏菜実すめらぎ ななみ

高校1年

特に細かい設定が全くありません。

これから考えます（笑）以上終わり。

能力：輻射波動

右手を赤黒く発光させ（ようするにチャージ）、掌から衝撃を発生させ空間を振動させる。

対象物に直接照射することで、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊する。

輻射波動によって発生する振動波によって相手からの攻撃から機体を丸ごとガードする障壁を生み出す。

モデルはコードギアスの紅蓮式（笑）

作磨 さくま 義嗣 よじつぐ

ロリ巨乳の変態マッドサイエンティスト。  
自分の目的のためなら洗脳なり薬物投与なり、なんでもしちゃう変態さん。

いい年こいたおっさんです。

簡単なキャラ設定　く手抜きでごめんね　く（後書き）

本作品を最後までお読みいただき、誠にありがとうございます。

これからも、いろいろな作品を書いていく予定です。  
今後とも宜しくお願い致します。

それではまた、別の作品でお会いしましょうノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7669/>

---

とある科学の幻曲奏者～シンフォニスト～

2010年10月10日14時27分発行